文化財愛護
シンボルマーク

北条町埋蔵文化財報告書17

鳥取大学附属図書館
郷土資料室

Hōjō
鳥取県東伯郡北条町

曲第1遺跡発掘調査報告書
Magari Oka
(曲岡遺跡) 第1集

1995. 3

北条町教育委員会

.2

Hōjō
鳥取県東伯郡北条町

曲第１遺跡発掘調査報告書
Magari Oka
（曲岡遺跡）第１集

1995.3

北条町教育委員会

序　　文

北条町は、原始・古代より文化の栄えた地域で、総面積20.99㎢程の小さな町にもかかわらず、遺跡の分布密度は県下一と言われています。

特に、縄文時代前期から晩期にかけての大量の土器・石器が出土し、「本県の縄文文化で最も豊富な資料を出し、かつ編年のための最も重要な役割をしている。」と評される島遺跡をはじめ、270基以上の古墳を数える土下古墳群。この中にあって、全国でも希有な「鹿の子文」をもつ人物埴輪、帽子をかぶっていると考えられる人物埴輪、「斜格子文」をもつ人物埴輪を出土した土下210号墳は全国的にも注目を集めた古墳であります。その他に、225基以上の古墳を数える曲古墳群など、著名な遺跡は枚挙に暇がないほどです。

ここに報告する曲第１遺跡（曲岡遺跡）は、北条町教育委員会が平成６年度に実施した県営北条西２期地区農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財調査であります。

この計画地内からは、遺構としては、古墳時代後期の竪穴住居跡や段状遺構などが発見されました。また、遺物としては弥生土器・土師器・須恵器など多量の土器類が出土し、今回の発掘調査によって曲地区の山裾部に営まれた古代文化の一端を知ることができました。

残念ながら、遺跡は記録を残すだけとなりましたが、これら記録や掘り出された出土品が整理され貴重な文化財として私達郷土の歴史を知り、愛する一助となれば幸甚と存じます。

なお、調査にあたり、調査員の方々をはじめ、調査関係者の皆様には、幾多の困難を克服し、本調査が終了したことに深く感謝申し上げます。

また、平成６年８月22日、猛暑。業半ばにして逝去された友定美保子調査員には、紙面をかりて氏に深甚なる謝意を表わすとともに、御冥福をお祈り申し上げます。

平成７年３月

北条町教育委員会

教育長　井　上　　浩

例　　言

1．本報告書は、平成6年度に、鳥取県倉吉地方農林振興局の委託を受けて、北条町教育委員会が主体となって実施した北条町曲字「岡」地区の埋蔵文化財発掘調査記録である。

2．調査体制は以下の通りである。

調査団長	井上　浩（北条町教育委員会教育長）
調査指導	長岡充展（鳥取県埋蔵文化財センター）
調　査　員	松本達之、宇田川　宏、西村勝義、日置粂左ヱ門、前田明範（以上北条町文化財保護委員） 友定美保子 樋口和夫（北条町教育委員会教育課社会教育係係長兼社会教育主事）
事務担当	樋口和夫
調査協力	松本　哲・井上三千代・川本美佐子・福田寛子

3．本書の執筆、編集は樋口が行った。

4．遺構の実測、図面作成、写真撮影は調査員及び中原由香里、福田香織が、遺物の実測・遺構図、土器の浄書は松本・井上・川本・福田が行なった。

5．本書に使用した方位は全て磁北を示す。

6．図面、写真、出土遺物等は北条町教育委員会が保管している。

目　　次

序　文
例　言
目　次
挿図目次、挿表目次、観察表目次、図版目次
第１章　調査に至る経緯……1
第２章　位置と環境……1
第３章　調査の結果……4
　第１節　調査の概要……4
　第２節　Ｂ区・Ｃ区の調査……4
第４章　まとめ……23
第５章　おわりに……28

挿　図　目　次

挿図１　曲第１遺跡（曲岡遺跡）位置図……1
挿図２　北条町遺跡分布図……2
挿図３　Ｂ区全体遺構図……５－６
挿図４　Ｄ区遺構図……7
挿図５　SI―01遺構図……8
挿図６　SI―03遺構図……9
挿図７　SS―01・02・03遺構図……10
挿図８　SS―04・05遺構図……11
挿図９　SD―01遺構図……12
挿図10　SK―01遺構図……12
挿図11　Ｃ区ピット群遺構図……13
挿図12　出土土器実測図（その１）……14
挿図13　出土土器実測図（その２）……15
挿図14　出土土器実測図（その３）……16
挿図15　出土土器実測図（その４）……17
挿図16　出土土器実測図（その５）……18
挿図17　出土土器実測図（その６）……19
挿図18　出土土器実測図（その７）……20
挿図19　出土土器実測図（その８）……21
挿図20　出土土器・石製品実測図（その９）……22

挿　表　目　次

挿表１　北条町内遺跡一覧表……2

観　察　表　目　次

弥生土器１～15……29
弥生土器16～19、土師器20～30……30
土師器31～38、土製支脚39～42、かまど43～47……31
須恵器48～62……32
須恵器63～77……33
須恵器78～80、その他81・82、SI……34

図　版　目　次

図版１　調査区遠景、SS―02、Ｂ区遺物出土状況
図版２　SS―03、Ｂ区完掘状況、Ｃ区ピット群
図版３　SS―06、Ａ区完掘状況、Ｃ区完掘状況
図版４　弥生土器１～19、土師器20～24
図版５　土師器25～38、土製支脚39
図版６　土製支脚40～42、かまど43～47、須恵器48・49
図版７　須恵器50～60
図版８　須恵器61～74
図版９　須恵器75～80、その他81・82、SI

第１章　調査に至る経緯

県営北条西２期地区農免農道整備事業は曲古墳群が所在する丘陵の裾部に沿って、東西に走行する形で計画された。これにより、曲地区の丘陵裾部の遺跡の有無について調査する必要が生じたため、北条町教育委員会は平成５年10月、曲地区（通称「曲岡」）における試掘調査を行った。

調査の結果、明確な遺構は認められなかったものの、多量の土器類が出土した。

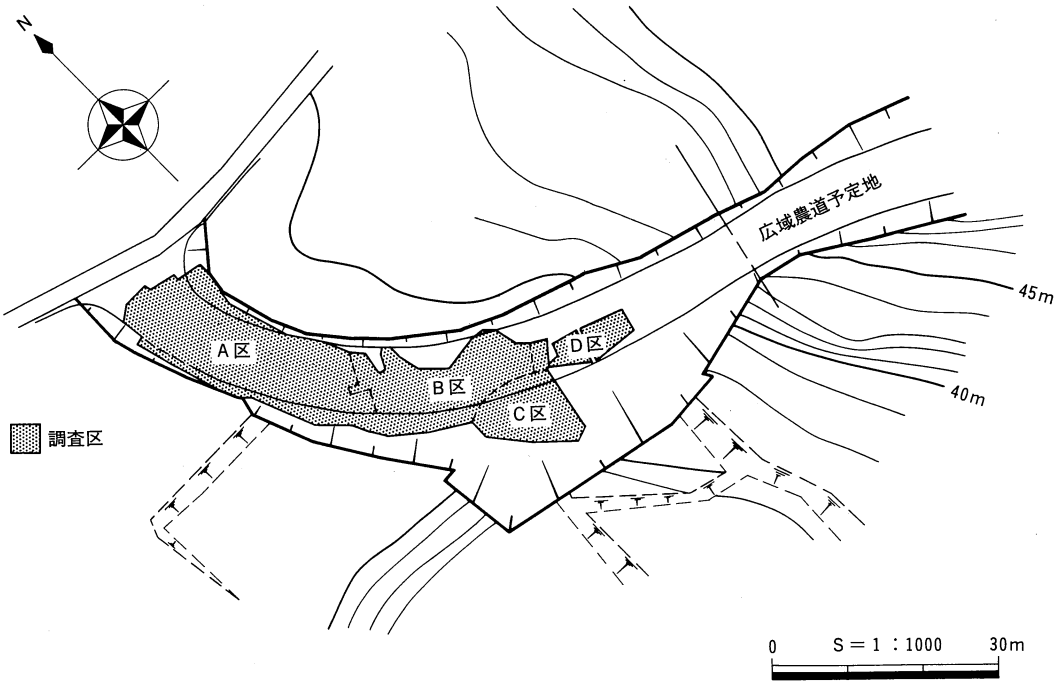
これを受けて、北条町教育委員会は県教育委員会文化課、県埋蔵文化財センターと協議した結果、計画地のほぼ全域について、事前に発掘調査を行い記録保存することにした。

調査期間は平成６年４月４日から平成７年３月24日の間である。

なお、本遺跡は遺物散布地「曲第１遺跡」として遺跡台帳に記載されていたが、字名をとって、新たに「曲岡遺跡」と命名した。

第２章　位置と環境

北　条　町　県の中央部に位置し、町域は県下第３の河川、天神川の左岸を占め、北部は海岸砂丘、中央部は沖積低地が広がり、南部山地は大山火山砕屑岩類と安山岩からなる丘陵性山地である。東は天神川を隔てて羽合町、西は大栄町、南は倉吉市に接し、北は日本海に面している。面積は20.99㎢と小さな町であり、当町は、町域の中央をJR山陰本線と県道羽合・東伯線（旧国道９号）が、さらに、国道９号線は海岸砂丘を東西に、ほぼ並行して走っている。



挿図１　曲第１遺跡（曲岡遺跡）位置図

挿図２　北条町遺跡分布図

A．曲第１遺跡(曲岡遺跡)	1．曲古墳群	2．土下古墳群
3．やすみ塚(土下213号墳)	4．茶臼山古墳群	5．北尾古墳群
6．島古墳群	7．天王山遺跡	8．北尾遺跡
9．島遺跡	10．曲226号墳	11．船渡遺跡
12．米里銅鐸出土地	13．米里第１遺跡	14．米里第２遺跡
15．天神川河床遺跡	16．宇ノ塚遺跡	17．殿屋敷遺跡
18．馬場遺跡	19．用露鼻遺跡	20．長畑遺跡
21．茶臼山要害	22．中浜遺跡	23．下神１号墳

挿表１　北条町内遺跡一覧表

曲岡遺跡　曲岡遺跡は町の南西部、標高171mを測る蜘ケ家山の北麓に位置する。現況は果樹園であり、北条平野、大栄町東端の眺望は良好である。なお、本遺跡の後背には、225基以上を数える古墳群が所在する曲古墳群が控えている。

所在地　曲岡遺跡は北条町曲地内に所在し、地番は北条町曲字岡773番地ほかである。

歴史的環境　縄文時代前期になると台地上から遺跡が低湿地へ移動しており、爪形文や刺突文土器が島遺跡（9）から出土している。中期、後晩期も低湿地の遺跡が継続して営まれており、島遺跡の他に、船渡遺跡（11）、天神川河床遺跡（15）などが見られる。

町内の弥生時代の様相は明確ではないが、曲岡遺跡（A）、北尾遺跡（8）、島遺跡などで弥生土器が出土している。

また、米里（12）の通称「蔵合屋」と呼ばれる畑地からは、弥生土器の壺と共に、袈裟襷の銅鐸が発見され、祭器の出土にこの地域の高度な弥生文化の一端を知ることができる。

町内の古墳時代の墓制を窺うと、前期前半には径20mの円墳、曲148号墳など箱式石棺を中心とした古墳が築造されはじめ、中期に入っても、20m以上の方墳、土下129号墳などに箱式石棺墓が継続されている。

後期には小型の前方後円墳や大型の円墳を中心として、曲古墳群（1）、土下古墳群（2）、茶臼山古墳群（4）、北尾古墳群（5）といった群集墳が盛んに築造され、県下有数の古墳分布を形成しており、当地域が倉吉と共に伯耆の中心であったことがうかがえる。

特に、全長33mを測る前方後円墳、土下213号墳（通称「やすみ塚」）の周辺からは、鹿埴輪の他に、人物埴輪、家型埴輪など。最近の調査で土下210号墳からは、全国でも希有な「鹿の子文」をもつ人物埴輪、帽子をかぶっていると考えられる人物埴輪、「斜格子文」をもつ人物埴輪が出土し、当古墳群が高度な後期古墳文化のもとに形成されたことを示している。

古墳時代の集落は曲岡遺跡(A)にみられ、山裾部や平野部に営まれている。その他、中世に至るまで、著名な遺跡は枚挙に暇がないほどである。

第３章　調査の結果

第１節　調査の概要

調　査　地　調査地は丘陵裾部の緩斜面にあたり、現況は果樹園である。地形から、北側の裾部をＡ区とし、南側の丘陵上に向けてＢ区、Ｃ区、Ｄ区と分割した。

調査面積　Ａ区245㎡、Ｂ区140㎡、Ｃ区110㎡、Ｄ区50㎡で、計495㎡である。

Ａ　　区　まずＡ区の調査から開始し、続いてＣ区、Ｄ区と行い、遺物が多量に出土したＢ区を最終調査区とした。その結果Ａ区では遺構、遺物とも全く認められなかった。

Ｂ　　区　Ｂ区では多量の土器包含層が厚く堆積しており、調査面積140㎡の中に、弥生土器をはじめ、土師器、須恵器などの土器類が、コンテナ15箱分出土している。遺構は竪穴住居跡３棟、段状遺構５基、溝状遺構２本、土壙１基で、いずれも古墳時代後期のものである。

Ｃ　　区　Ｃ区ではピット群が認められた。遺物は若干の土師器、須恵器が出土したのみである。

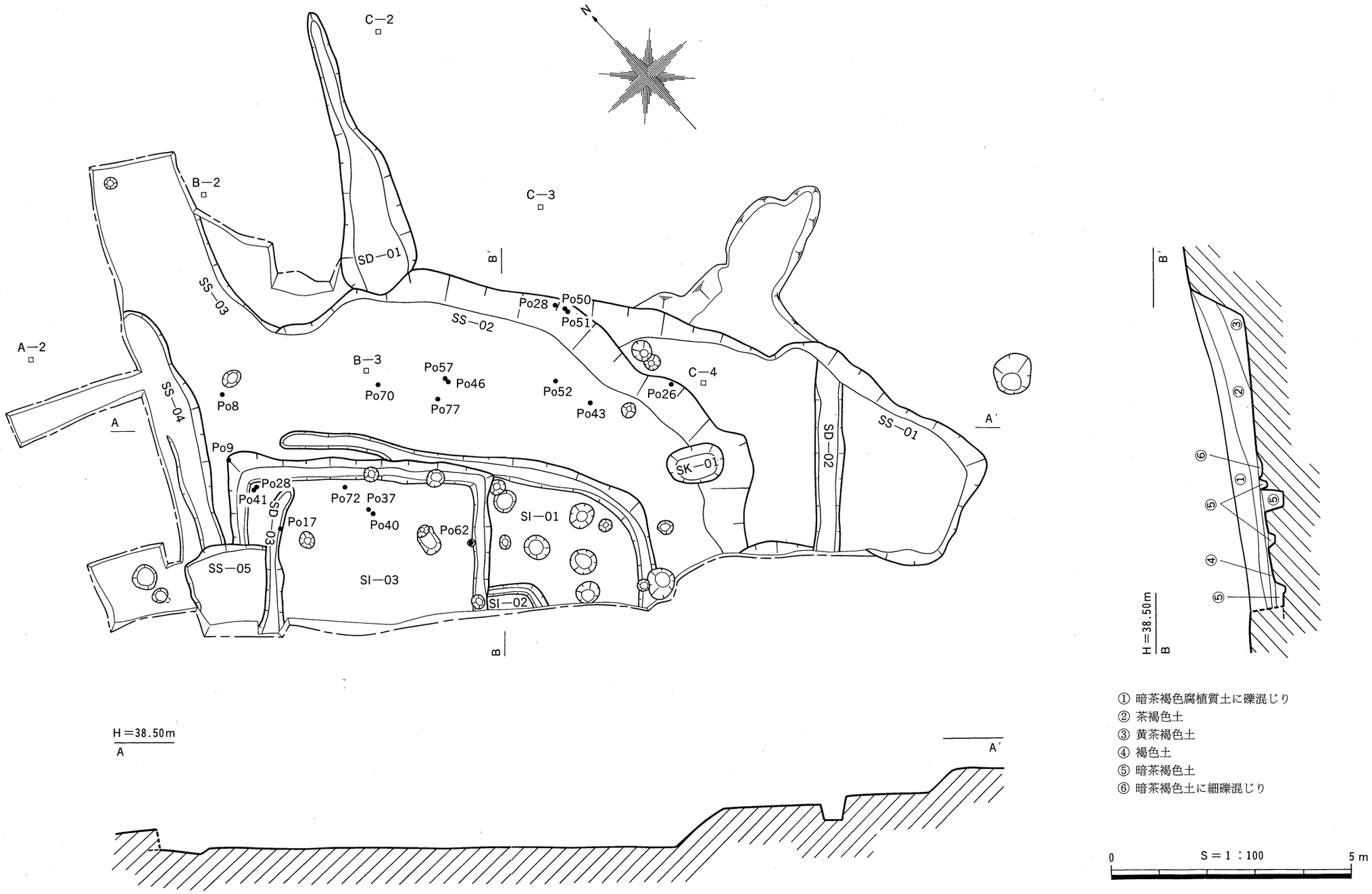
Ｄ　　区　Ｄ区では時期不明の段状遺構１基を確認したが、遺物は全く出土しなかった。

第２節　Ｂ区・Ｃ区の調査

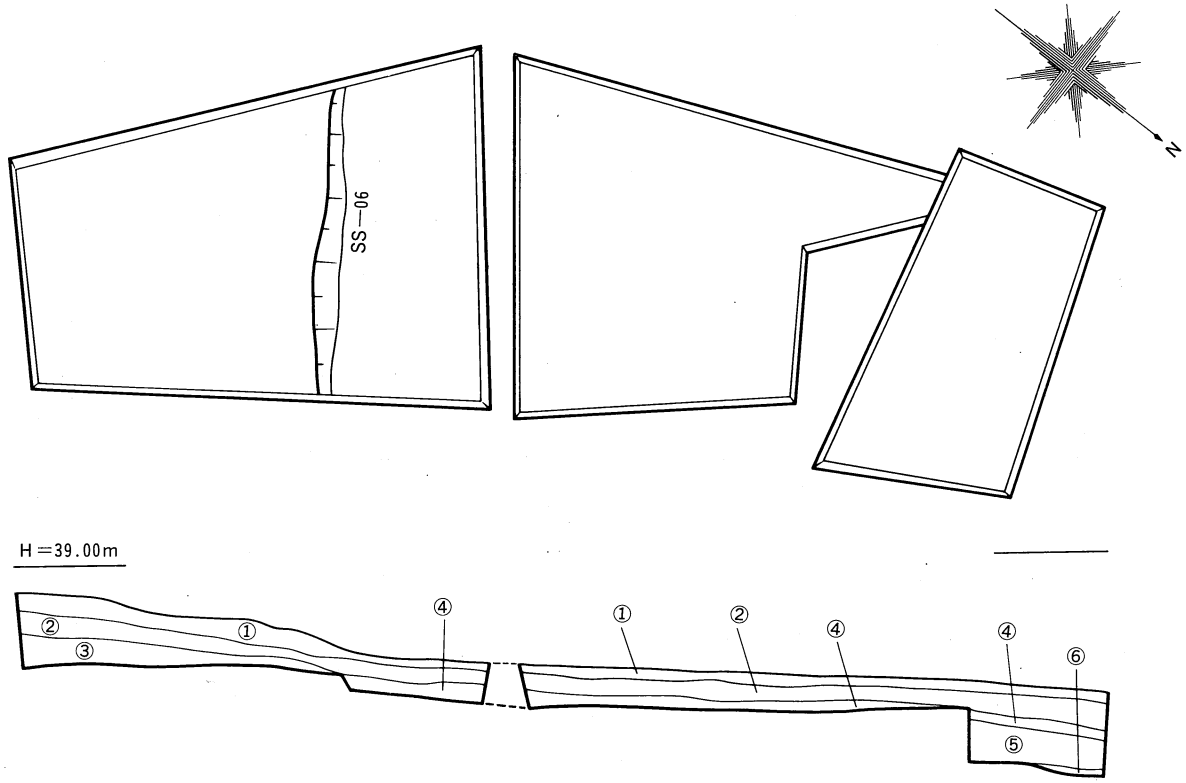
Ｂ　　区　Ｂ区は標高37～38mを測る緩斜面部で、東西方向にややテラス地形を呈す所が認められた。ここに竪穴住居跡をはじめとする古墳時代後期の遺構が切り合った状態で検出された。多量の遺物が出土しているが、このうち弥生土器は堆積層上位～中位の暗茶褐色土中で、上方から流れ込んだものと推定される。土師器、須恵器は堆積層中位～下位にまんべんなくみられ、その出土量は、本遺跡の遺物出土量の大半を占める。

Ｃ　　区　Ｃ区は標高35m前後を測る緩斜面部で、古墳時代後期と推定されるピット群が認められた。遺物は土師器、須恵器が出土している。

Ｄ　　区　なお、Ｄ区は標高38mを測る果樹園に改変された平坦面で、遺構面も後世、大きく削平されている。ここでは、段状遺構１基が確認された。Ｄ区では遺物は全く出土しなかった。


N
C—2
B—2
C—3
SD—01
SS—03
SS—02
Po28
Po50
Po51
A—2
B—3
Po57
Po46
Po70
Po77
Po52
Po43
C—4
Po26
SS—01
SD—02
SK—01
A
A′
Po8
SS—04
Po9
Po28
Po41
SD—03
Po72
Po37
Po40
Po17
Po62
SI—01
SS—05
SI—03
SI—02
B
B′
H＝38.50m
A
A′
H＝38.50m
B
B′
①
②
③
④
⑤
⑥
① 暗茶褐色腐植質土に礫混じり
② 茶褐色土
③ 黄茶褐色土
④ 褐色土
⑤ 暗茶褐色土
⑥ 暗茶褐色土に細礫混じり
0
S＝1：100
5 m

挿図3　B区全体遺構図



① 茶褐色腐植質土　② 茶褐色土に地山細礫混じる
③ 褐色土　④ 暗茶褐色土
⑤ 暗茶褐色粘質土　⑥ 暗褐色土

0　S＝1：100　5m

挿図4　D区遺構図

第１竪穴住居跡（挿図５、図版２）

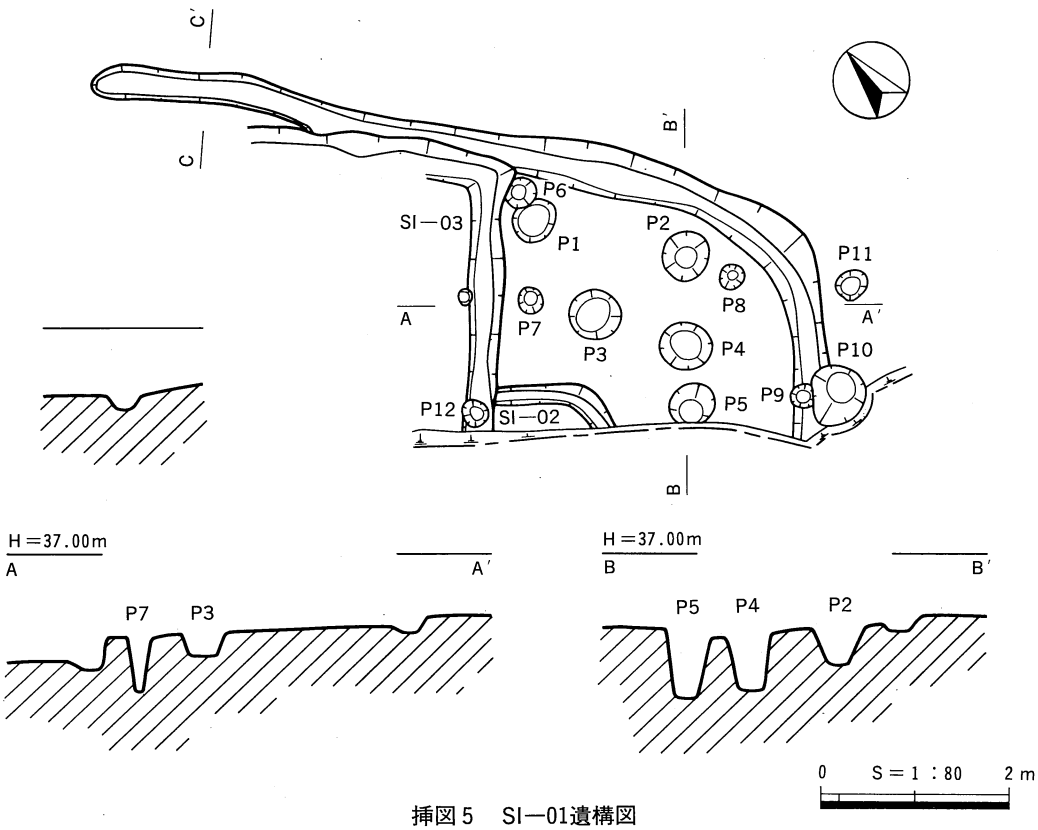
位　置　Ｂ区南隅に位置する。本住居跡西側は第３竪穴住居跡により大きく切り込まれている。また、南西側床面が第２竪穴住居跡により一部切り込まれている。残存する床面の平均標高は36.30mを測る。

形　態　残存する側溝より平面長方形もしくは方形を呈すと推定される。壁高は東壁で最高14cmを測る。残存する床面は平坦で長辺3.10m、短辺2.50m、残存床面積5.58m²である。

側　溝　側溝は北側～東側側壁下に残存し、長辺7.20m、幅25～10大字、深さ７～４cmを測り、断面Ｕ字形を呈す。

柱　穴　柱穴は残存する床面や側溝中で11本検出された。ただし、切合い状況や調査区の関係から西側及び南側が不明なため、これらの柱穴が建替えを含めて、全て本住居跡に伴うものか否かは現況では言及し得ない。規模はP1（50×44―66）、P2（54×48―42）、P3（55×50―28）、P4（56×51―59）、P5（48×44―60）、P6（36×30―63）、P7（30×23―69）、P8（28×27―33）、P9（25×24―29）、P10（65×58―58）、P11（35×30―12）cmである。

時　期　遺物は全く出土しなかったため、時期は明確にし得ないが、その切り合い関係から本住居跡は第２、第３竪穴住居跡よりも古く、立地条件等から古墳時代後期頃のものと思われる。



挿図５　SI―01遺構図

第２竪穴住居跡（挿図５、図版２）

位　置　Ｂ区南隅に位置する。第１竪穴住居跡の床面を切り込んで造られている。また、西側は第３竪穴住居跡により切り込まれている。

形　態　調査区の関係から東側側壁の一部と、その側壁下を巡る側溝の一部、そして床面の一部を検出したに留まる。残存する側溝より平面方形プランと推測される。壁高は13cmを測り、残存する床面は長辺1.20m、短辺0.40m、残存床面積0.45m²である。

柱　穴　第３竪穴住居跡南側側溝中で検出されたP12（26×25―10）cmは本住居跡に伴う柱穴と推定される。

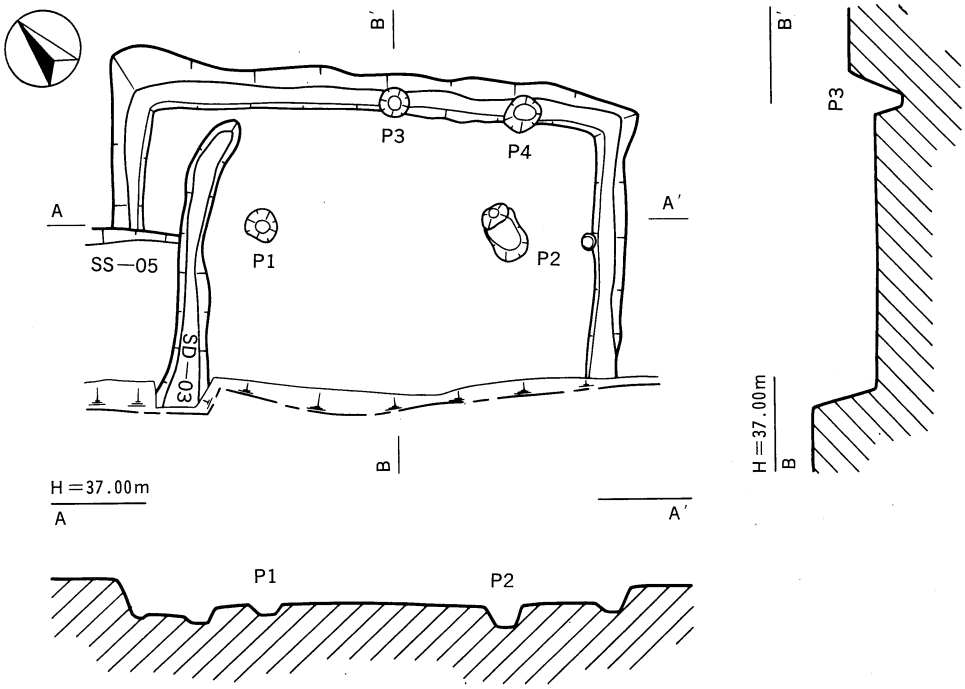
時　期　遺物は全く出土しなかった。切り合い関係から第３竪穴住居跡より古く、また、第１竪穴住居跡より新しく、古墳時代後期頃のものと思われる。

第３竪穴住居跡（挿図６、図版２）

位　置　Ｂ区南西側に位置する。第１竪穴住居跡西側床面を大きく切り込んで造られている。さらに、第２竪穴住居跡をも切り込んでいる。また、本住居跡西側には第５段状遺構が、西側床面には第３溝状遺構が掘り込まれている。床面の平均標高は35.90mを測る。

形　態　調査区の関係から南側は不明であるが、残存部から平面方形と推定される。壁高は北東壁で最高35cmを測る。残存する床面は平坦で、長辺4.70m、短辺は残存部3.00m、残存床面積12.05m²である。

側　溝　側溝は側壁下に冂の字形に残存し、長辺5.10m、短辺は残存部2.60m、幅22～６cm、深さ10～４cmを測り、断面Ｕ字形を呈す。



挿図６　SI―03遺構図

0　S＝1：80　2m

柱　穴　柱穴は床面で２本、北東側側溝中で２本検出されたが、このうち主柱穴はP1、P2の２本で、規模はP1（38×34—31）、P2（61×35—29）cmを測り、柱穴間距離は2.60mである。側溝中に掘り込まれたP3（32×29—20）、P4（38×34—28）cmは補助柱穴であろう。

なお、本住居跡は調査区の関係から南側が不明なため、主柱穴が２本か、或るいは４本で構成されるか否かは現況では不明である。

遺　物　床面東端直上で須恵器杯身（P_0、62）、埋土中よりP_0、72が出土している。

時　期　出土遺物より、古墳時代後期（７世紀前葉）のものと考えられる。

第１段状遺構（挿図７、図版２）

位　置　Ｂ区南東端に位置する。本遺構中央部に第２溝状遺構が掘り込まれている。

形　態　平坦面は長辺7.60m、短辺3.80mを測り、壁高は東壁で最高35cmである。

時　期　遺物が全く出土しなかったため、時期不明である。

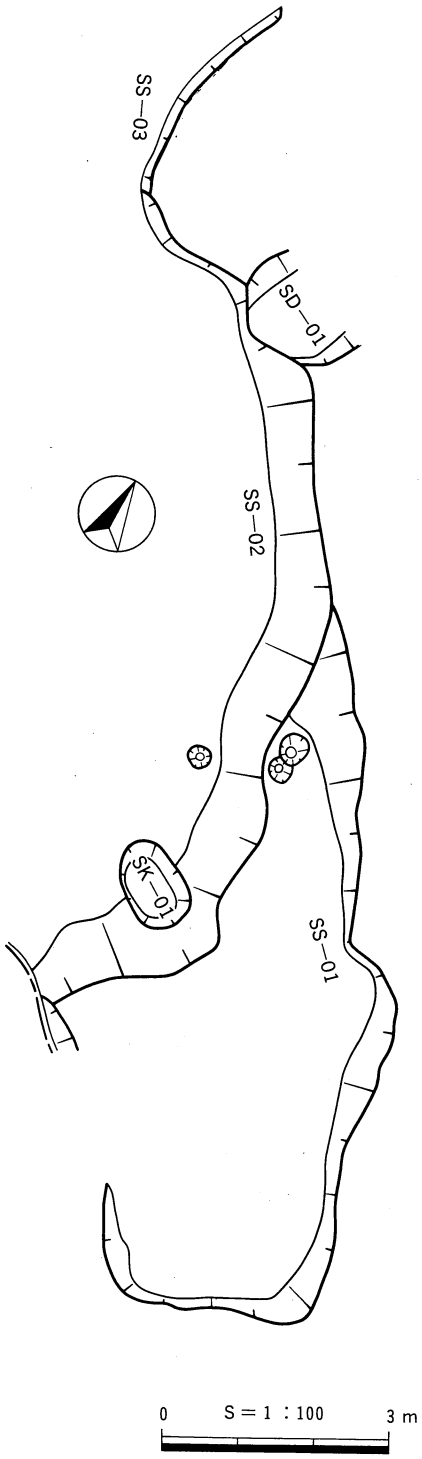
第２段状遺構（挿図７、図版２）

位　置　Ｂ区中央に位置する。南東側に第１段状遺構、北側に第１溝状遺構、さらに北西側に第３段状遺構が接している。また、西側には第１竪穴住居跡、南東側壁面から平坦面にかけて第１土壙が掘り込まれている。

形　態　平坦面は長辺9.80m、短辺3.20mを測り、東側の壁高は最大で1.10mを残す。

遺　物　平坦面直上でかまど（P_0、43・46）、埋土中より須恵器杯蓋（P_0、52・57）、須恵器提瓶（P_0、77）などが出土している。

時　期　出土遺物（P_0、43）より、７世紀中頃のも



挿図７　SS—01・02・03遺構図

のと思われる。

第３段状遺構（挿図７、図版２）

位　置　Ｂ区北側に位置する。南側に第２段状遺構が接し、西側に第４段状遺構が掘り込まれている。

形　態　調査区の関係で北側が不明であるが、平坦面は残存部で長辺4.30m、短辺2.00mを測り、東側の壁高は最大で30cm残こす。

時　期　遺物は全く出土せず、時期は不明であるが、立地条件や第２段状遺構との切り合い関係から、第２段状遺構より古く、古墳時代後期頃のものと推定される。
なお、弥生土器甕口縁部（P_0、８・９）は遺構外出土のものである。

第４段状遺構（挿図８、図版２）

位　置　Ｂ区北西端に位置する。東側に第３段状遺構が接し、南側には第５段状遺構が掘り込まれている。

形　態　調査区の関係で長辺5.10m、高さ0.20mを測る東壁と、その下に残存する長さ2.50m、幅40～30cm、深さ６cm程の浅い側溝を検出したに留まる。
なお、本遺構平坦面南側にはピット２本、規模は（46×45―18）、（25×24―10）cmが検出されている。

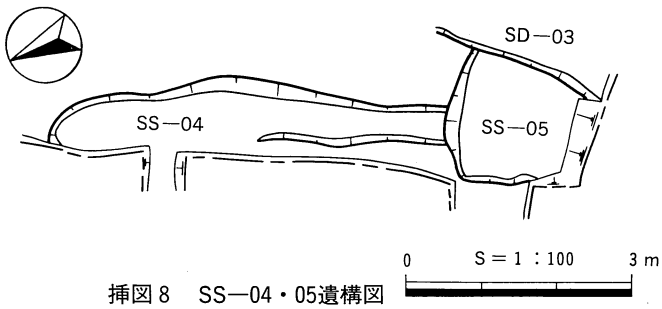
時　期　遺物は全く出土せず、時期は不明であるが、立地条件等から古墳時代後期頃のものであろう。

第５段状遺構（挿図８、図版２）

位　置　Ｂ区西端に位置する。北側の第４段状遺構を一部切り込み、東側は第３溝状遺構により消滅している。また、北側は第３竪穴住居跡の一部を切り込んでいる。

形　態　調査区の関係で長辺1.70m、高さ0.25mを測る北壁と、その下に残存する長さ1.60mの平坦面が残存するのみである。土壙状の形態をとるが、調査区の関係で南側が不明なため、取敢えず段状遺構として扱った。

時　期　遺物は全く出土しなかったが、立地条件や第３竪穴住居跡と第４段状遺構、並びに第３溝状遺構との切り合い関係から、少なくとも第３竪穴住居跡と第４段状遺構より新しく、第３溝状遺構よりは古く、古墳時代後期（７世紀前葉以降）のもので、これらに近似する時期であろう。



挿図８　SS―04・05遺構図

第１溝状遺構（挿図９）

位　置　Ｂ区北端に位置する。南端が第２段状遺構に接している。

形　態　南北に帯状に延びる溝で、北に行く程底面が広くなっている。規模は長さ6.10m、幅1.60～0.38m、深さ0.38～0.10mを測る。

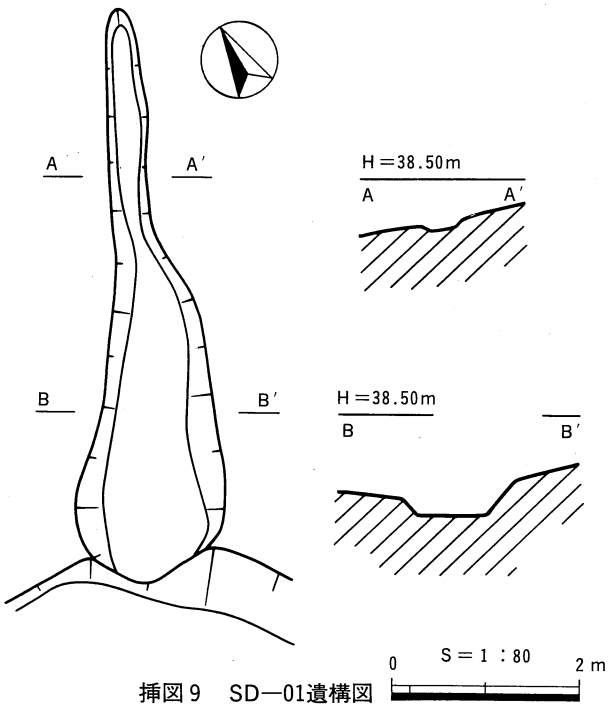
時　期　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。

第２溝状遺構（挿図３）

位　置　Ｂ区南東側に位置する。第１段状遺構平坦面に掘り込まれている。

形　態　南東から北西に帯状に一直線に延びる溝で、残存部の規模は長さ6.00m、幅0.6～0.5m、深さ20cm程のものである。

時　期　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、切り合い関係から第１段状遺構より新しい。



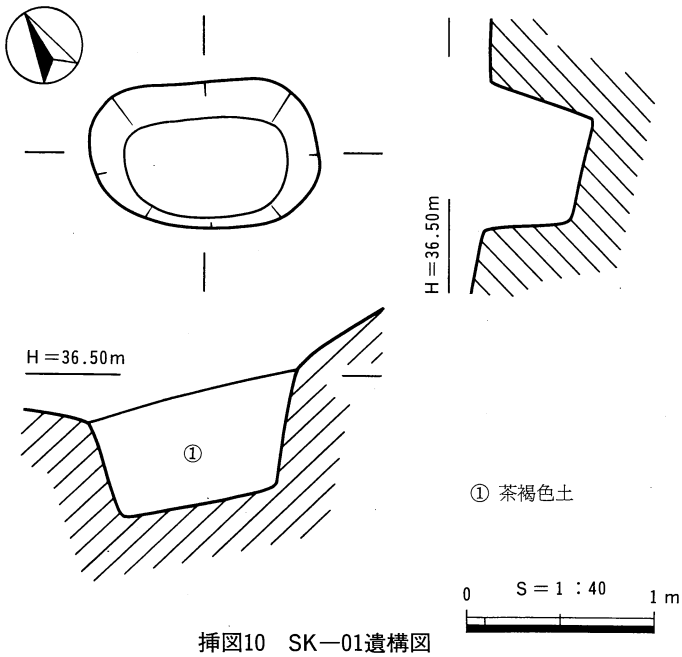
挿図９　SD―01遺構図

第３溝状遺構（挿図６）

位　置　Ｂ区西側に位置する。第３竪穴住居跡の床面に掘り込まれている。

形　態　南東から北西に帯状に延びる溝で、残存部の規模は長さ3.20m、幅0.40～0.25m、深さ10を測る。

時　期　遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、切り合い関係から、第３竪穴住居跡、第５段状遺構より新しい。



挿図10　SK―01遺構図

第１土壙（挿図10、図版２）

位　置　Ｂ区南東側に位置する。第２段状遺構南東側壁面から平坦面にかけて掘り込まれている。

形　態　平面長方形を呈し、主軸はN―60°―Wをとる。上縁部の規模は長辺1.20m、短辺0.76mを測る。底面はやや傾斜がつき、長辺0.85m、短辺0.52mで、深さは0.78mである。埋土は茶褐色土の単層。

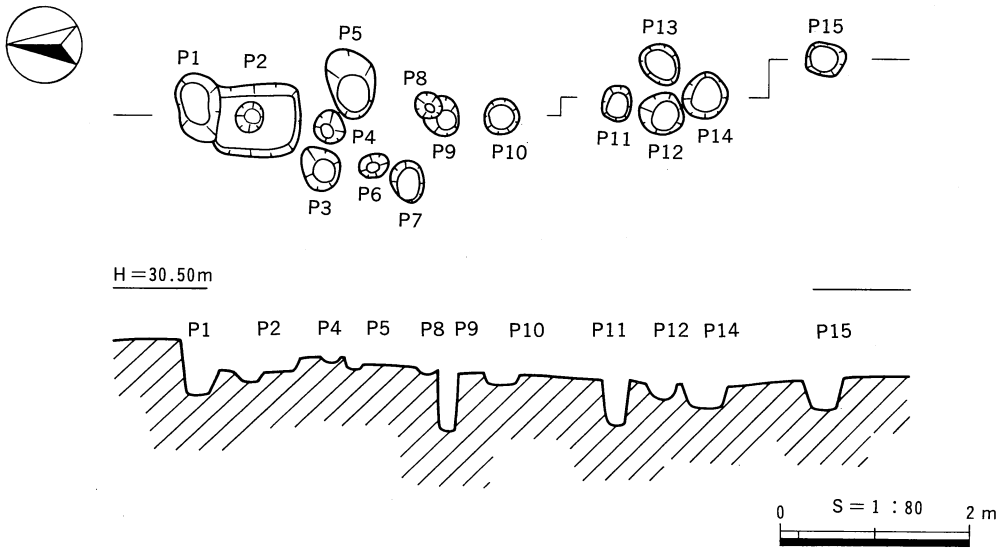
時　期　遺物が全く出土しなかったため、時期・性格とも不明であるが、立地条件等から第２段状遺構に関連する施設の可能性がある。

Ｃ区ピット群（挿図11、図版２）

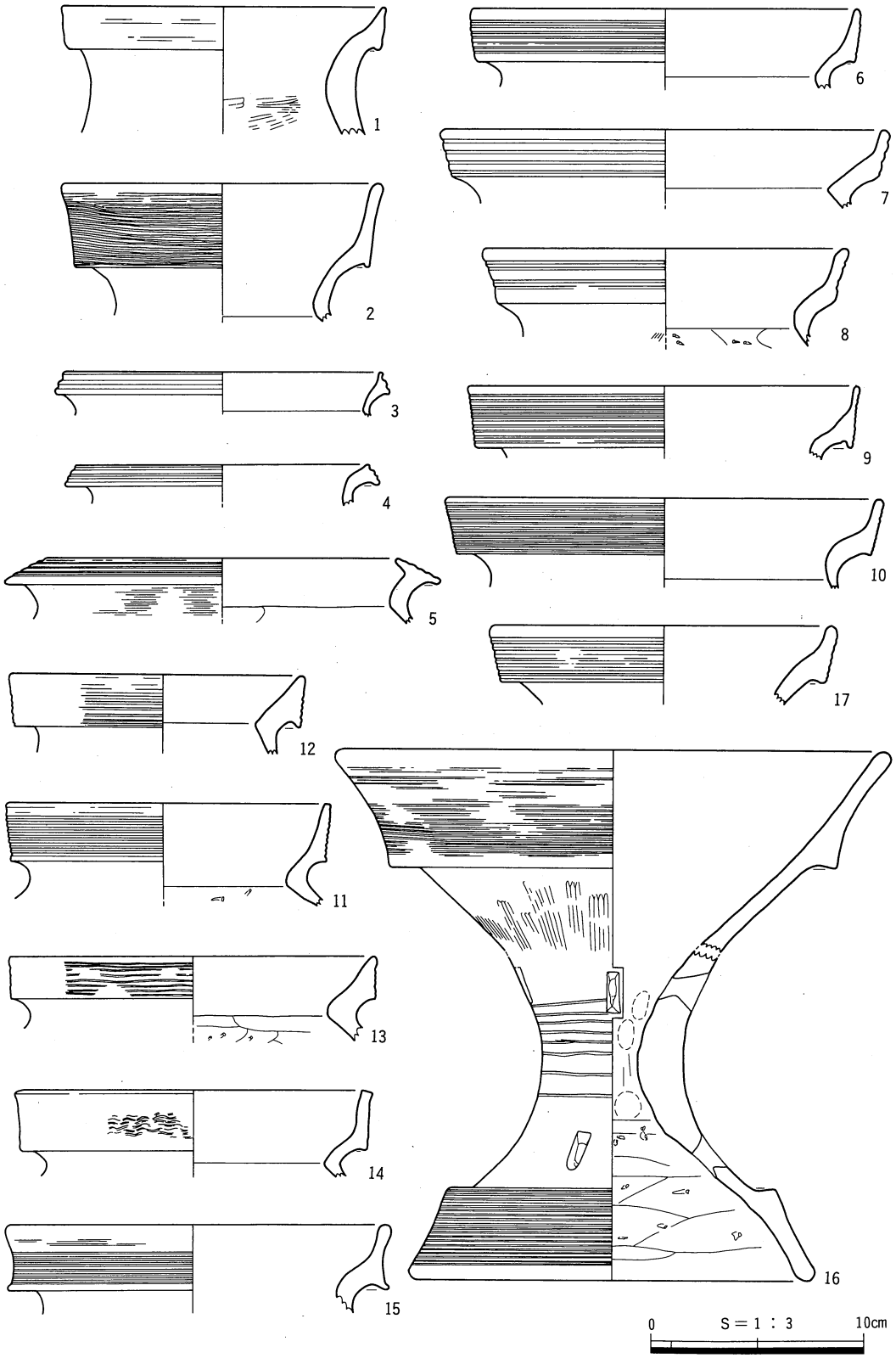
位　置　Ｃ区南側に位置する。

ピット　平坦面で15本のピットを検出した。これらはほぼ南北方向に並んでおり、規模はP1（56×42―54）、P2は平面長方形を呈する二段掘りのもので、86×76―18の中に26×24―10、P3（44×40―22）、P4（32×30―10）、P5（75×50―20）、P6（30×25―10）、P7（42×34―18）、P8（25×25―８）、P9（42×40―65）、P10（38×38―10）、P11（38×32―48）、P12（45×42―21）、P13（46×38―22）、P14（46×44―25）、P15（42×36―33）cmを測る。

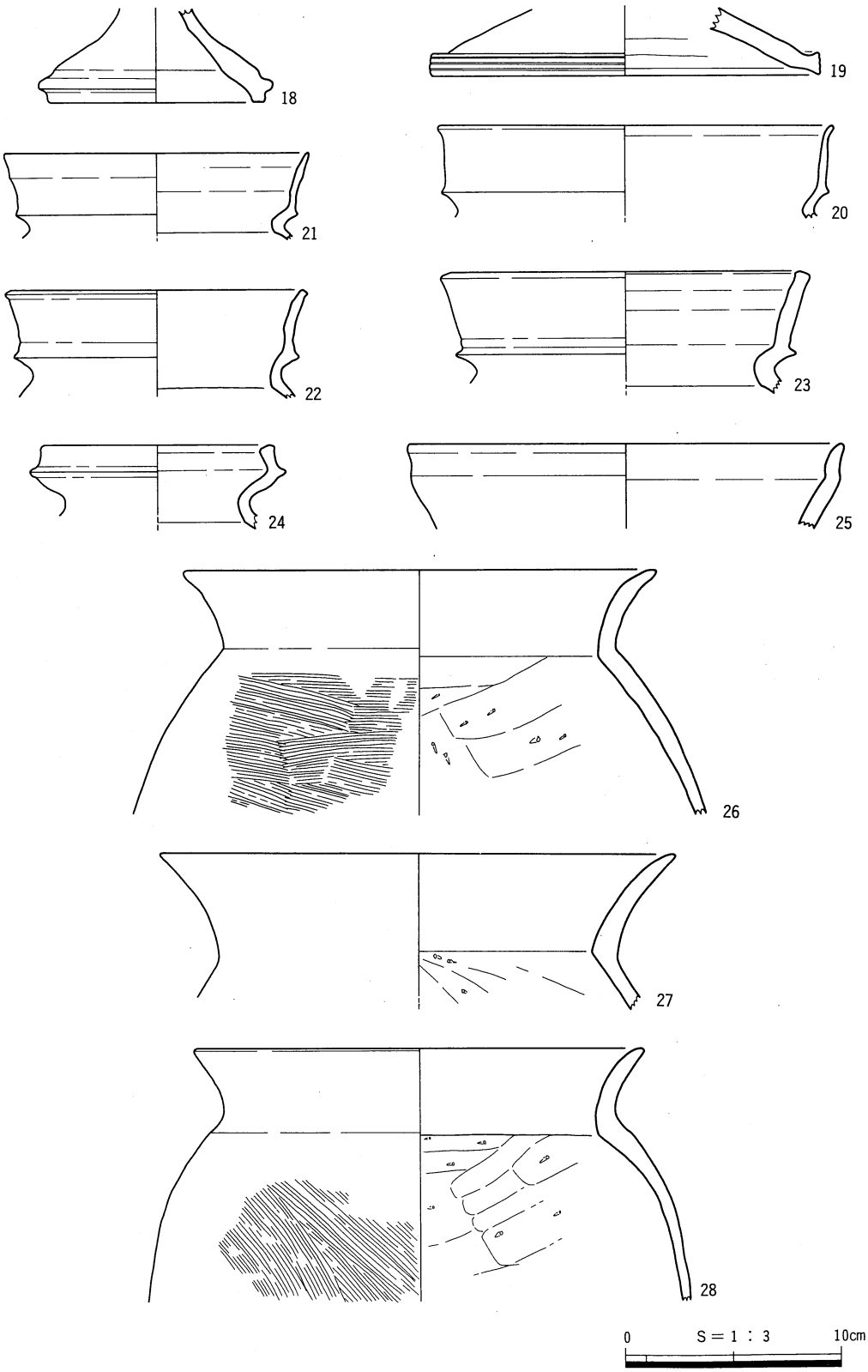
時　期　遺物が全く出土しなかったため、時期・性格とも不明である。



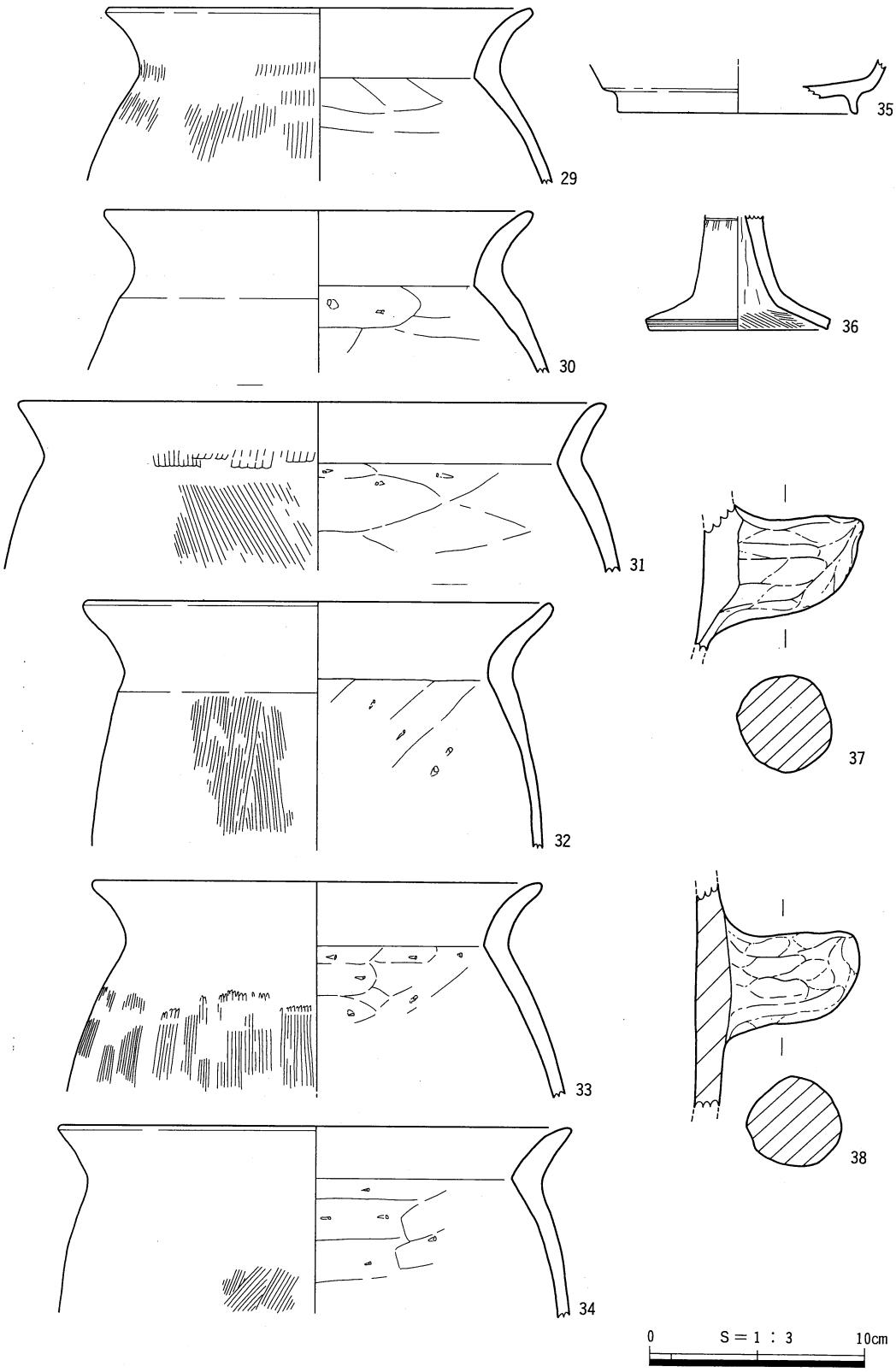
挿図11　Ｃ区ピット群遺構図



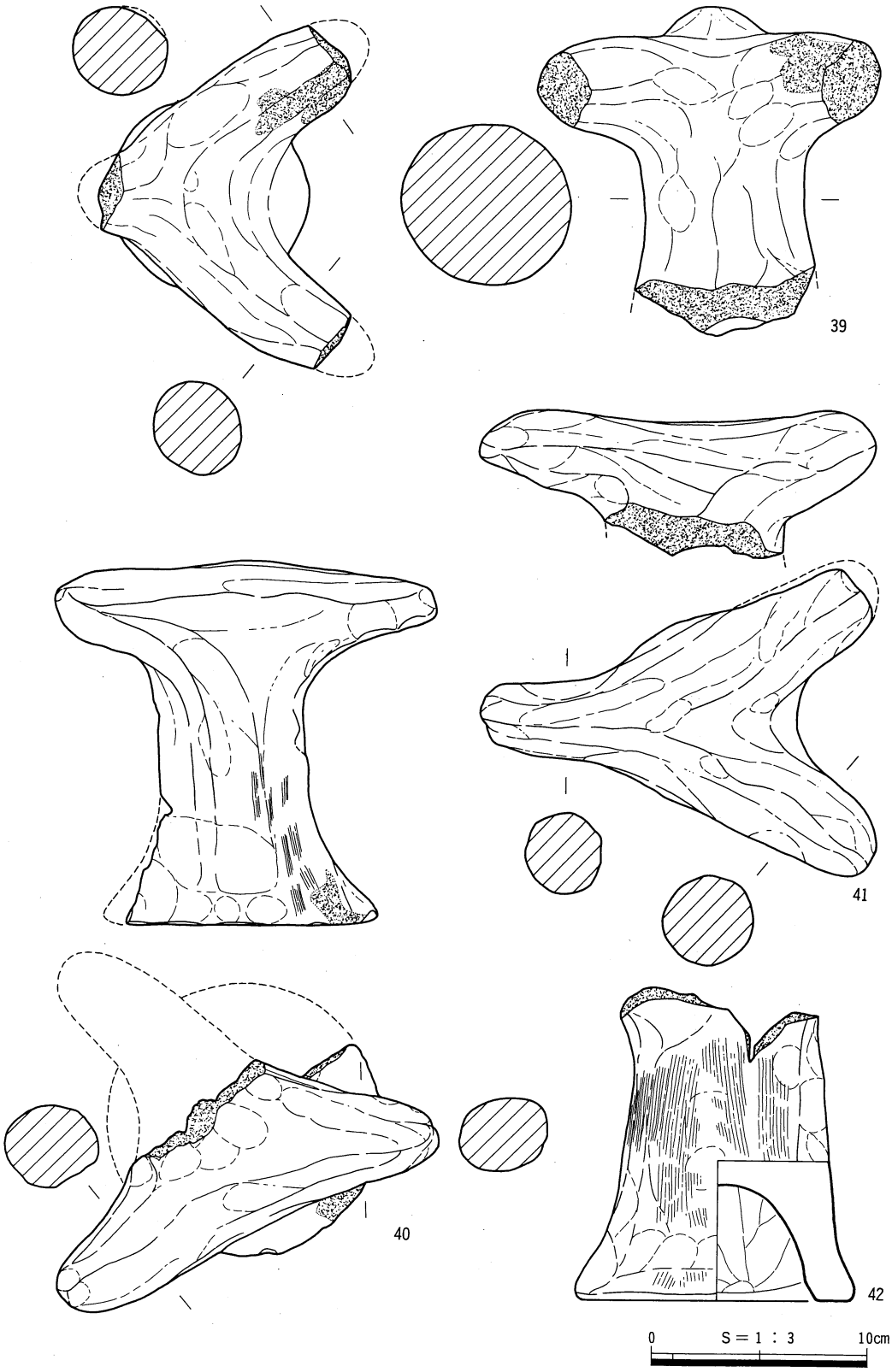
挿図12　出土土器実測図（その１）



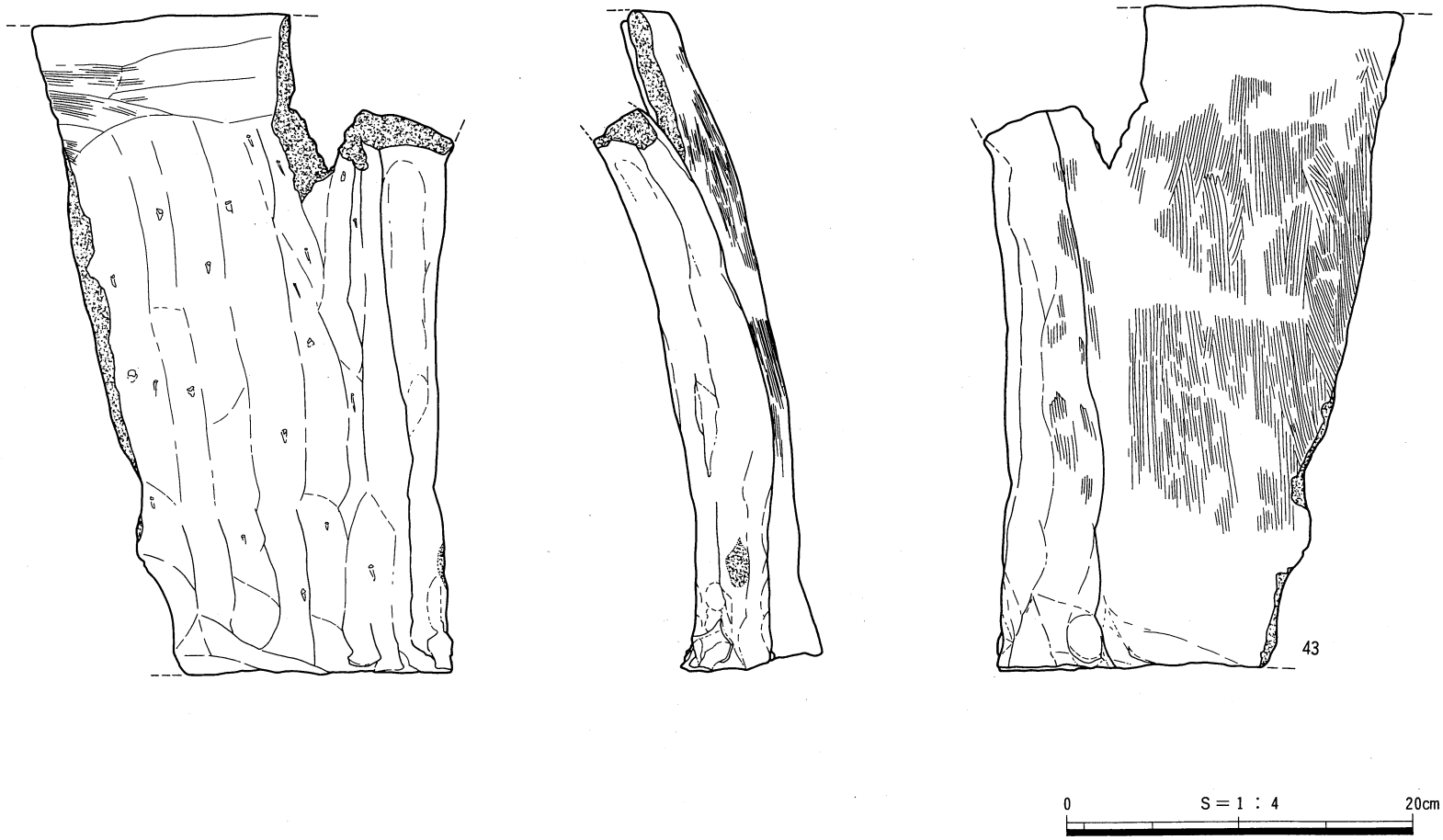
挿図13　出土土器実測図（その２）



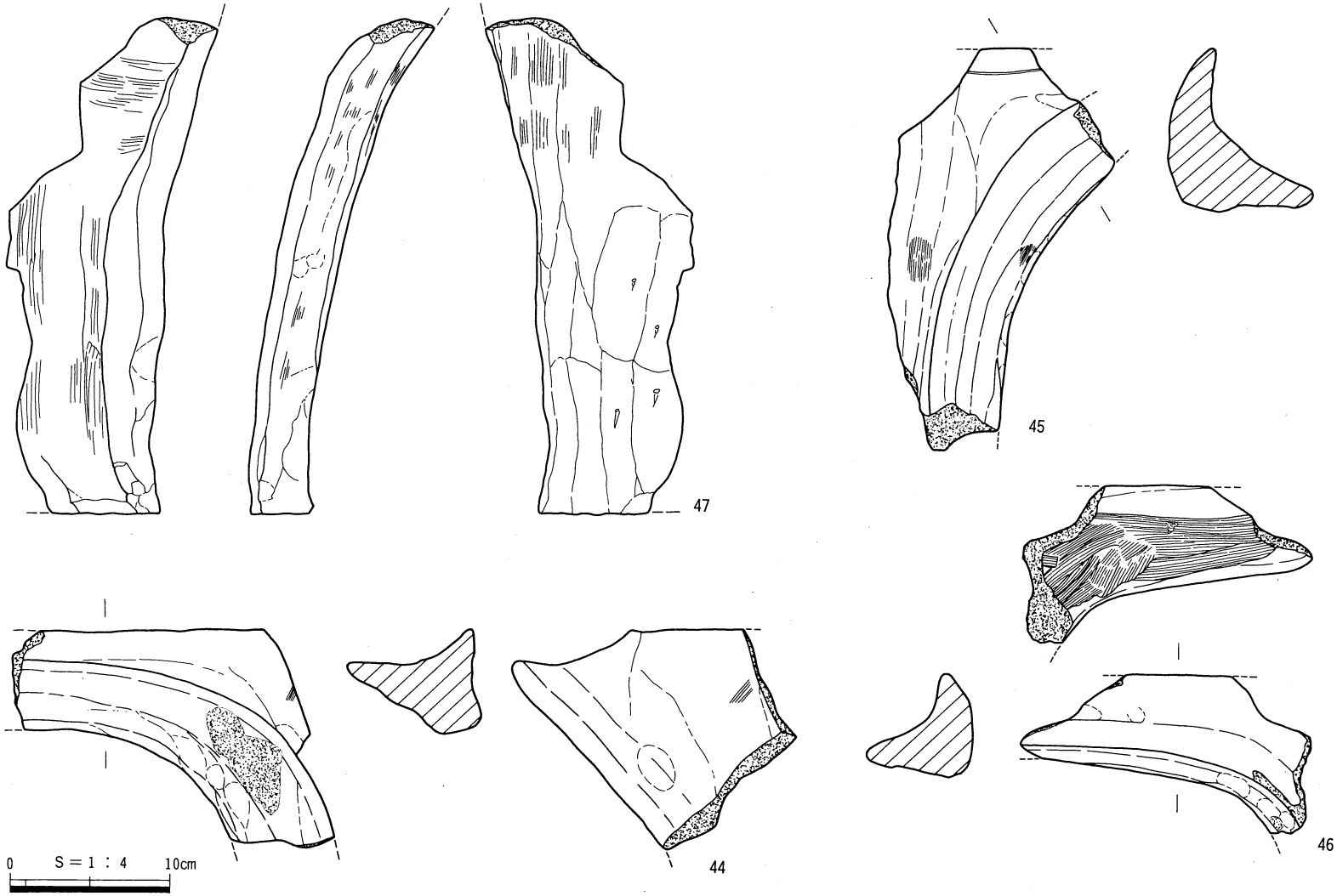
挿図14　出土土器実測図（その３）



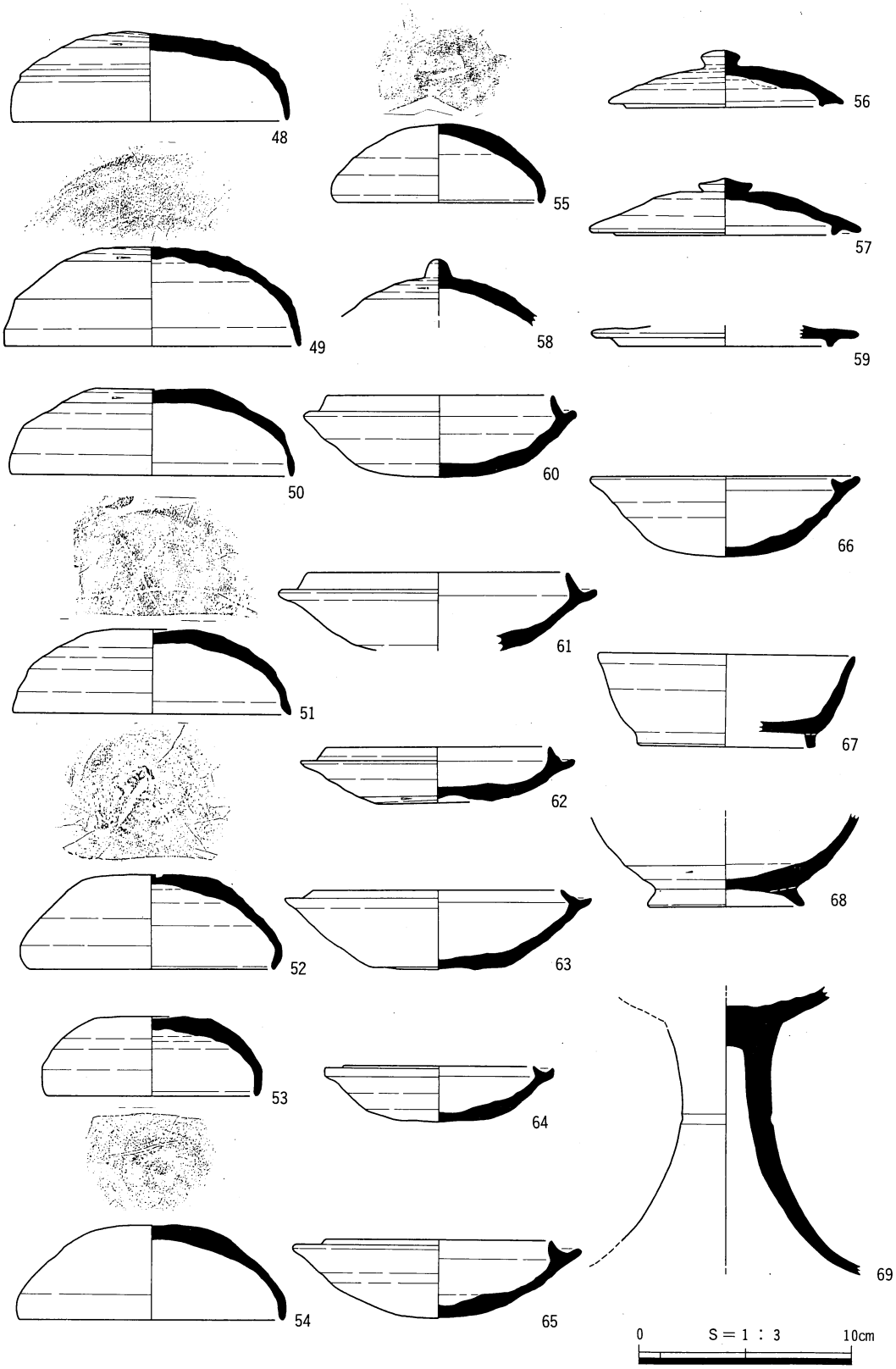
挿図15　出土土器実測図（その４）



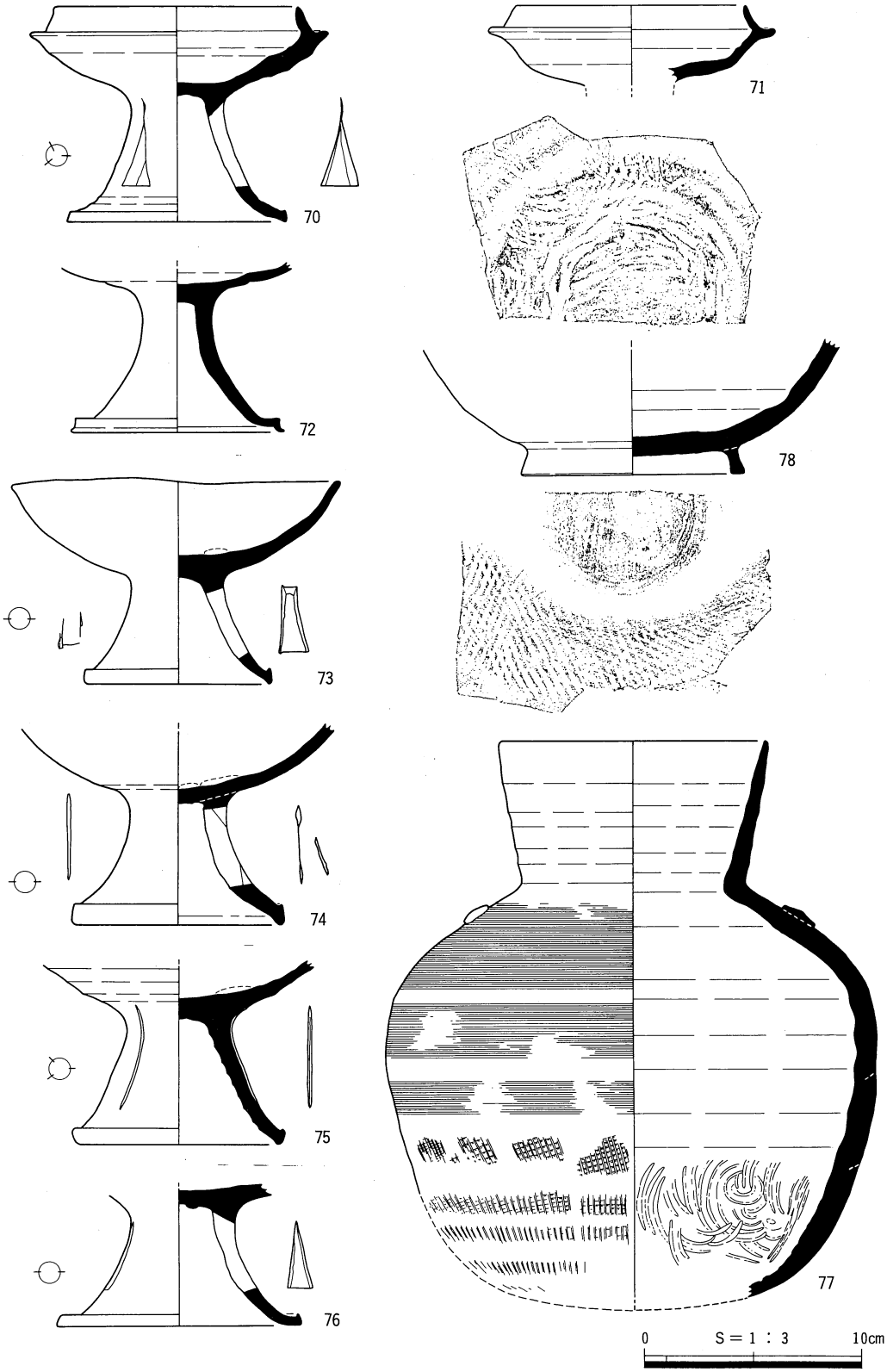
挿図16　出土土器実測図（その５）



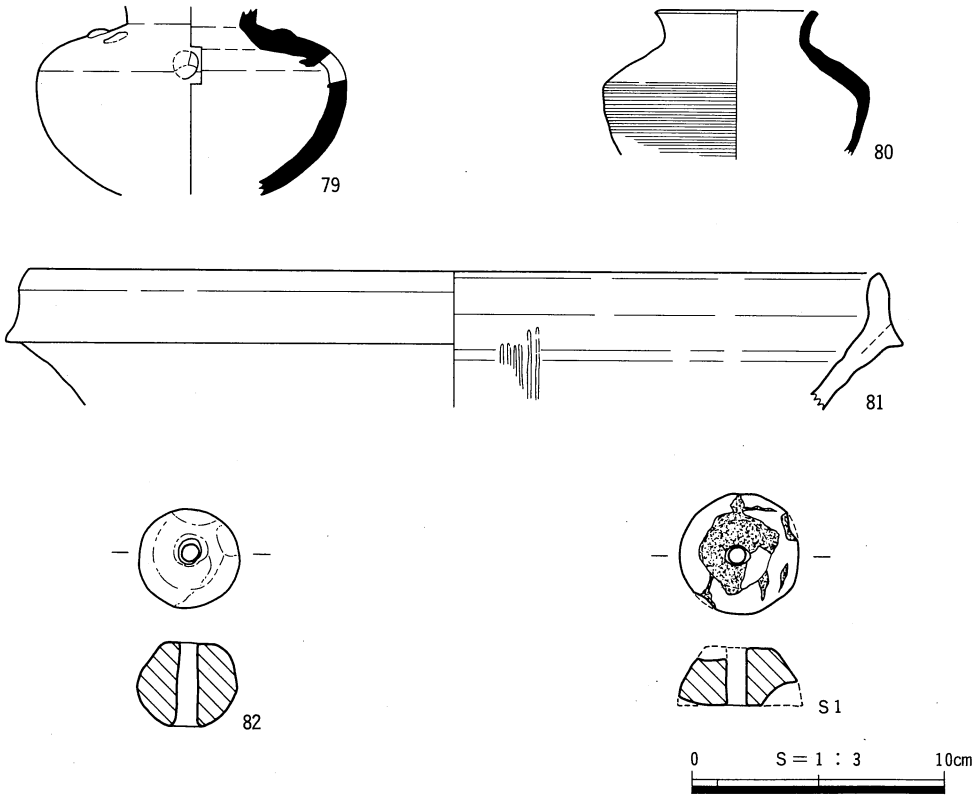
挿図17　出土土器実測図（その６）



挿図18　出土土器実測図（その７）



挿図19　出土土器実測図（その８）



挿図20　出土土器・石製品実測図（その９）

第4章　ま　と　め

第1節　遺構について

曲岡遺跡では、遺構はB区で竪穴住居跡3棟、段状遺構5基、溝状遺構3本、土壙1基。C区でピット群を検出した。これらの遺構のうち、遺物が伴出せず、時期不明なものもみられたが、ここではB区で検出された遺構について概観する。

1．B区の遺構

B区では標高37～38m前後の丘陵裾部緩斜面で、東西方向にややテラス地形を呈す所が認められ、ここに竪穴住居跡をはじめとする古墳時代後期の遺構が切り合った状態で検出された。

（竪穴住居跡）S1―01・02・03

SI―01は長辺7.2m程の長方形もしくは正方形プランで、残存部は全形の4分の1程度と推定される。

SI―02は調査区と切り合い関係から、わずかに方形を呈すものであろうと予想ができる程度の部分しか検出されていない。

SI―03は調査区と切り合い関係から、一部不明な所もあるが、一辺5.1m程の方形プランで、床面より主柱穴2本が検出されている。3棟の竪穴住居跡は切り合った状態であり、いずれも側壁下に側溝を巡らしており、主軸方向も北西―南東にとっている。古墳時代後期、恐らく7世紀前半を中心として、土地条件の制約のもとに営まれたものであろう。なお、3棟とも炉跡等は全く検出されていない。

（段状遺構）SS―01・02・03・04・05

SS―01は長辺7.6m、短辺3.8mを測る平坦面をもつ。

SS―02は長辺9.8m、短辺3.2mを測る平坦面をもち、立地条件、出土遺物等からSI―03造営時には既に機能しており、その関連施設と考えられよう。なお、SK―01はSS―02の南東側壁面から平坦面にかけて掘り込まれた長辺1.20m、短辺0.76m、深さ0.78mを測る長方形プランの土壙である。

SS―03は現況で長辺4.3m、短辺2.0mの平坦面をもつが、立地条件、切り合い関係からSS―04と同時期（古墳時代後期）に機能した関連施設であろう。

SS―05については現況では性格については触れられない。

（溝状遺構）SD―01・02・03

これらの溝状遺構は切り合い関係から明らかに後世のものと考えられるが、遺物も全く出土しなかったため、現況では性格ともに不明である。

以上、簡単にB区の遺構について概観したが、調査区と切り合い関係等から、余りにも資料が断片的であり、全く本質にせまることができなかった。これらの点については今後の課題としたい。

第2節　遺物について

曲岡遺跡では、特にB区に集中して遺物が出土している。遺構に伴うものは、わずかであり、大半が遺構外からの出土であった。器種をみると、弥生土器・土師器・須恵器などである。ここでは、これらの遺物を弥生土器・土師器・須恵器・その他に分類し、観察結果を概述する。

1．弥生土器

全てのものが遺構外出土であり、器種構成をみると壺・甕・高杯などである。

（壺形土器）1・2

1はほぼ直立する複合口縁で、外面に数条の凹線文を施す。内面頸部にヨコハケ。

2は淡黄茶色を呈すやや外傾する長めの複合口縁で、外面に櫛描直線文を施す。内面肩部削り。

時期的にみると、1は弥生時代後期前葉、2は後期後葉に位置付けられる。

（甕形土器）3～15

3・4は口縁端部はわずかに拡張され、内傾する外面に2条（3）、3条（4）の凹線文を施す。3は内面頸部削り。

5は口縁端部は上下に幅広く拡張され、大きく内傾する外面に5条の凹線文を施す。内面頸部以下削り。以上3～5は弥生時代後期前葉以前のものであろう。

6はほぼ直立する複合口縁で、外面に7条以上の擬凹線文を施す。

7・8は外傾する複合口縁で、外面に4条（7）、4条以上（8）の凹線文を施す。

9はやや外傾する複合口縁、10は外傾する複合口縁で、外面に10条（9）、12条（10）の櫛描直線文を施す。

11・14はほぼ直立する複合口縁で、口縁端部は角張り、11は外面に櫛描直線文、14は外面に波状文を施す。

12はほぼ直立する短かめの複合口縁で、外面に櫛描直線文、13は直立する複合口縁で、外面にヘラ描直線文の後、横ナデを施す。

15はやや外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁で、口縁端部は丸くおさめる。下端の稜は外方に尖がり、外面に櫛描直線文を施す。

以上6～15のうち、頸部が不明瞭な9・15を除き、他は全て内面頸部以下削りを施す。時期的にみると、弥生時代後期中葉・後葉に位置付けられる。

（鼓形器台）16・17

16は受部と脚台部を複合状につくり、外面に擬凹線文を巡らし、筒部に長方形透し孔を穿ち、中程に8条のヘラ描直線文を施す。外面筒部上位にタテハケメ、内面筒部下位以下削り。

17は複合状の受部で、外面に擬凹線文を施す。

時期的にみると、弥生時代後期中葉に位置付けられる。

（脚部）18・19

18は高杯の脚台部で、八の字状に開き、接地面は角張り、水平方向に突出する稜をもつ。

19は大きく八の字状に開く複合状の脚台部で、外面に3条の凹線文を施す。

時期的にみると、18・19とも内面削りを施し、弥生時代後期に位置付けられる。

以上、曲岡遺跡出土の弥生土器は弥生時代後期前葉～後葉のもので、本遺跡内、特に丘陵上にこれらの時代の遺構が所在する可能性は極めて高い。

2．土師器

若干の遺構に伴うものがみられるが、大半は遺構外出土である。器種構成をみると、甕・杯・高杯・把手などである。

（甕形土器）20～34

20は直立して立ち上がり、端部がわずかに外方に屈曲する複合口縁。器壁は薄い。

21はやや外反気味に外傾する複合口縁で、口縁端部はすぼまる。器壁は薄い。

22は外反気味に外傾する複合口縁で、上端面は角張り、やや外方に肥厚する。下端の稜は外方に突出する。

23は外傾する複合口縁で、上端面は角張り、下端の稜は外方に鋭く突出する。

24は内傾する短かい複合口縁で、上端面は角張り肥厚し、下端の稜は水平方向に突出する。

以上のものは複合口縁形態をもち、時期的にみると、20・21は青木IV期併行で古墳時代前期初頭。22は青木V・VI期併行で前期前半。23は青木VII期併行で前期後半。24は複合口縁の退化期で中期中葉に位置付けられる。

25はほぼ直立する短かい退化した複合状を呈す。

26・27・28は外反する長めの単純口縁で口縁端部はすぼまる。

29・30・33は外反する単純口縁で、口縁端部は角張る（29)、丸味をもつ（30・33)。

31は外傾する単純口縁。

32は外反気味に外傾する単純口縁で、口縁端部はやや角張る。

34は外反する単純口縁で、口縁端部はすぼまる。

以上25～32のものは、時期的にみると、25は古墳時代中期末葉。26～34は全て「くの字」に屈曲する単純口縁をもつが、古墳時代後期（6世紀・7世紀）に位置付けられよう。

（杯）35

35は有台杯で、高台は低く、接地面は平坦。腰に平坦面を作り出す。8世紀中葉頃のものか。

（高杯）36

36は高杯の脚台部で、端面に2条の浅い沈線を施す。

（把手）37・38

37・38とも牛角状の把手。

3．須恵器

土師器同様、若干の遺構に伴うものもみられるが、大半は遺構外出土である。器種構成をみると、杯蓋・杯身・高杯・提瓶・壺などである。

（杯蓋）48～59

48は口縁部と天井部の境は2条の浅い沈線で区別される。外面天井部3周ヘラ削り、中心部ナデを施す。

49は口縁部と天井部の境は強めのナデにより純い稜をもつ。外面天井部２周ヘラ削り、中心部ナデを施す。外面天井部ヘラ記号。

50・51は口縁部と天井部の境に稜はなく、不明瞭。50は天井部２周ヘラ削り、中心部ナデ・51は天井部ヘラ切り後、ナデを施す。外面天井部ヘラ記号。

52・53・55は口縁部と天井部の境に稜はなく不明瞭で、体部から口縁部が丸く内湾する。外面天井部ヘラ切り未調整。52は外面、53は内面天井部にヘラ記号。

54は口縁部と天井部の境は不明瞭で、外面天井部ヘラ切り後ナデを施す。

56は宝珠状のつまみ、57は擬宝珠状のつまみがつき、かえりは口縁部からわずかに出る。

58はTK—217型式併行。乳頭状のつまみがつく。外面天井部３周ヘラ削り。

59は蓋。

以上のものは、Ⓐ（陰田Ａ—2b類）天井部周辺を２～３周削り、中心部を削りのこし、これにナデを施すもの（48・49・50）。Ⓑ（陰田Ａ—３類）天井部ヘラ切り後ナデを施すもの（51・54）。Ⓒ（陰田Ａ—４類）天井部ヘラ切り未調整のもの（52・53・55）で、このうち、53・55は口径10cm未満である。Ⓓ乳頭状つまみとかえりがつき、口径が10cm前後もの（58）。Ⓔ宝珠状、或るいは擬宝珠状つまみとかえりがつくもの（56・57）。TK—48型式併行。Ⓕその他（59）に分類のされ、ⒶからⒸ、ⒹからⒺへと流れを追うことができる。時期的にみると、Ⓐ７世紀初頭、Ⓑ～Ⓒ７世紀中葉～後葉。Ⓓ７世紀前葉。Ⓔ７世紀後葉に位置付けられる。

（杯身）60～67

60・61は風化の為、外面調整不明。60は内面底部ヘラ記号。

62は立ち上がりは短かく内傾し、断面三角形を呈す。受部は丸くおさめ、底部平坦。外面底部２周ヘラ削り、中心部はヘラ切り未調整。

63は立ち上がりは短かく、大きく内傾し、受部は丸くおさめる。外面底部ヘラ切り未調整。

64は口径8.9cmと小型で、立ち上がりは短かく内傾し、受部からわずかに出る。受部は角張る。外面底部ヘラ切り未調整。

65は立ち上がりは短かく内傾し、受部は丸くおさめる。外面底部ヘラ切り後ナデを施す。

66は立ち上がりは極めて短かく内傾し、形骸化し、受部から出ない。受部は丸くおさめる。外面底部ヘラ切り未調整。

67は有台杯で、高台は低く、底部端に付けられ、下端接地面は平坦。外面底部ナデ。

以上のものは、Ⓐ（陰田Ａ—2b類）に分類されるが、底部周辺２周削り、中心部はヘラ切り未調整のままで、ヘラ切り後ナデを施すものより後出的なもの（62）。Ⓑ（陰田Ａ—３類）底部ヘラ切り後ナデを施すもの（65）。Ⓒ（陰田Ａ—４類）底部ヘラ切り未調整のもの（63・64・66）で、このうち、64は口径8.9cmと小型である。Ⓓ有台杯で、高台は底部端に付けられ、下端接地面は平坦。外面底部ナデ。に分類され、ⒶからⒸ・Ⓓへと流れを追うことができる。時期的にみると、Ⓐはヘラ切り未調整出現期で７世紀前葉。TK—217型式併行。Ⓑ７世紀中葉。Ⓒ、Ⓓ７世紀後葉に位置付けられる。

（壺）68・78・80

68は長頸壺の底部で、高台は八の字状に開き、下端接地面はほぼ平坦。底部ナデ。外面底部周辺2周の削り。

78は高台が付き、外面平行タタキ、内面同心円タタキ。

80は短頸壺でやや外反する口縁部をもつ。体部にカキ目。

以上、時期的にみると、68は7世紀後葉～末葉のものであろう。

（高杯）69～76

69は長脚で、一条の浅い沈線を巡らす。透かしはない。

70・71は有蓋高杯で、70は低脚で、三角形透かしを三方に入れる。

72は低脚で透かしはない。

73は椀状の杯部をもつ無蓋高杯。脚部は低脚で、長方形透かしを一方に、もう一方の透かしは切れ目となる。脚端部外面に直立する面をもつ。

74は椀状の杯部をもつ無蓋高杯。脚部は低脚で、透かしは二方とも切れ目となる。

75は脚部は低脚で、透かしは三方とも切れ目となる。

76は脚部は低脚で、三角形透かしを二方に入れる。

以上のうち、73は時期的にみると、7世紀中葉。70・71は6世紀後葉頃のものであろう。

（提瓶）77

77はやや外傾する筒状の口縁部をもち、把手は形骸化したボタン状のものを貼り付ける。外面肩部～胴部カキ目。底部平行タタキ。内面底部同心円タタキ。7世紀中葉頃のものであろう。

（瑞）79

79は胴部の破片で、肩部にボタン状のふくらみが付く。

以上、曲岡遺跡出土の須恵器は古墳時代後期（6世紀後半以降）～飛鳥時代に限定され、中でも7世紀代のものが、大半である。

3．その他

（土製支脚）39～42

39は支脚部と尻尾部。

40は尻尾部は水平方向に延び、脚部は円柱状で、脚端部は八の字状に開く。

41は支脚部と尻尾部で、尻尾部は長めで、やや水平方向に延びる。二本の支脚部の開きは鈍い。削り後、指押え。

42は円柱状の脚部で、脚端部は八の字状に鈍く開き、接地面は平坦。底部は中空状に高く凹む。外面タテハケメ。内面削り。

（かまど）43～47

43は口縁部～右側焚口部の破片で、底部接地面は平坦。体部外面タテハケメ。内面タテ方向の削り。

44は口縁部～右側庇部の破片。

45は口縁部～左側庇部の破片。庇部、体部ナデ、タテハケメ残こる。

46は口縁部～右側庇部の破片。庇部外面ナデ、内面ヨコハケ。

47は左側焚口部の破片。外面体部上位ヨコハケ、中位タテハケメ、ナデ。内面上位タテハケメ、以下タテ方向の削り。

（すり鉢）81

81は備前すり鉢の口縁部で、内傾する面をもつ。内面におろし目。

（土垂）82

82は長径4.0cm、厚さ3.4cmの土垂。

（紡錘車）SI

SIは淡黄白色滑石製紡錘車で、長径4.8cm、厚さ2.4cmを測る。

第5章　おわりに

今年の夏は記録的な猛暑とかんばつに見舞われた。この影響は本遺跡の調査中にも如実に現われ、遺構検出も困難を極めた。遺構検出面や地山にはシートを被せたりして養生に努めたが、ひびわれが入り、思うに任せなかった。当然ながら、県内は言うに及ばず西日本各地の発掘調査現場の調査も大変であっただろうと思う。こよみの上では、そろそろ朝夕は初秋の涼風が吹くはずの８月22日も30度を越す猛暑であったが、この日、調査員の友定美保子さんが突然逝去された。つい先刻まで一緒に調査に携わっていたのに、余りにも突然で、しかも業中ばであり残念でならない。本遺跡の現地調査終了まであと一息と言う時だった。

曲りなりにも、後を引き継ぎ本報告書をまとめることができたのも、友定さんのおかげと感謝しています。紙面をかりて友定美保子さんに深甚なる謝意を表すとともに、御冥福をお祈り申し上げます。

また、調査にあたって円滑な作業ができたのは、猛暑の中、発掘に参加していただいた方々の献身的な協力と、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センターを始め、この調査にご協力いただいた方々のおかげであり、末筆ながら、これらの方々に感謝の意を表します。

遺物観察表

器種	土器番号	挿図	図版	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
弥生土器壺	1	12	4	復口径15.0	口縁部～頸部破片。ほぼ直立する複合口縁で、外面に数条の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ヨコハケ。	密。1～2㎜径の石英点在。	良好	淡茶褐色	
弥生土器壺	2	12	4	復口径14.6	口縁部～頸部破片。やや外傾する複合口縁で、外面に櫛描直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面肩部ケズリ。	密。1～3㎜径の白色砂粒含む。	良好	淡黄茶色	B区
弥生土器甕	3	12	4	復口径14.6	口縁部破片。口縁端部はわずかに拡張され、内傾する外面に2条の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。白色微細粒わずかに含む。	良好	濃茶褐色	B区
弥生土器甕	4	12	4	復口径13.4	口縁部破片。口縁端部はわずかに拡張され、内傾する外面に3条の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。	密。1㎜径の白色砂粒わずかに含む。	良好	暗黄茶色	B区
弥生土器甕	5	12	4	復口径16.4	口縁部～頸部破片。口縁端部は上下に幅広く拡張され、大きく内傾する外面に5条の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。外面頸部ヨコハケ。内面頸部以下ケズリ。	密。1～3㎜径の石英点在。	良好	淡橙白色	
弥生土器甕	6	12	4	復口径18.0	口縁部～頸部破片。ほぼ直立する複合口縁で、外面に7条以上の擬凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。1㎜径の石英多く含む。	良好	外面 灰茶褐色 内面 暗茶褐色	内面に黒斑。
弥生土器甕	7	12	4	復口径20.5	口縁部破片。外傾する複合口縁で、外面に4条の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。1㎜径程度の白色砂粒を含む。	普通	内外面 黄茶色 断面 灰褐色	B区
弥生土器甕	8	3 12	4	復口径16.8	口縁部破片。外傾する複合口縁で、外面に4条以上の凹線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。外面頸部タテハケメ。内面頸部左方向ケズリ。	密。0.5～2㎜径の長石・石英と、微細黒雲母粒を含む。	良好	淡乳白褐色	B区
弥生土器甕	9	3 12	4	復口径20.0	口縁部破片。やや外傾する複合口縁で、外面に10条の櫛描直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。	粗。1～2㎜径の白色砂粒多量に含む。	良好	黄褐色	B区
弥生土器甕	10	12	4	復口径20.0	口縁部破片。外傾する複合口縁で、外面に12条の櫛描直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	粗。1～2㎜径の白色砂粒を多く含む。	やや良	黄茶褐色	B区
弥生土器甕	11	12	4	復口径15.0	口縁部～頸部破片。ほぼ直立する複合口縁で、端部はやや角張る。外面に櫛描直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部右方向ケズリ。	密。1～3㎜径の白色砂粒含む。	普通	内外面 橙黄茶色 断面 黒色	B区
弥生土器甕	12	12	4	復口径14.0	口縁部～頸部破片。ほぼ直立する複合口縁で、外面に櫛描直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。1㎜程度の白色砂粒を少し含む。	良好	外面 肌色 内面 茶肌色 断面 灰色	
弥生土器甕	13	12	4	復口径17.0	口縁部～頸部破片。直立する複合口縁で、外面にヘラ描直線文の後、横ナデを施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部右方向ケズリ。	密。微細砂粒含む。	良好	外面 暗黒褐色 内面 白茶褐色	
弥生土器甕	14	12	4	復口径15.6	口縁部～頸部破片。ほぼ直立する複合口縁で、端部は角張る。外面に波状文を施す。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。2㎜径の石英わずかに含む。	良好	外面 白黄茶色 内面 白橙色	
弥生土器甕	15	12	4	復口径18.0	口縁部～頸部破片。やや外反気味に外傾して立ち上がる複合口縁で、上端は丸くおさめ、下端の稜は尖がる。外面に櫛描直線文を施す。	内外面横ナデ。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	良好	淡黄茶色	B区

器　種	土器番号	挿図	図版	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎　土	焼成保存	色　調	備考
弥生土器鼓形器台	16	12	4	復口径25.0 器高25.0 底径18.0	受部と脚台部を複合状につくり、外面に擬凹線文を巡らす。筒部に長方形の透し孔を穿ち、中程に8条のヘラ描直線文を施す。	口縁部内外面横ナデ。外面筒部上位にタテハケメ。脚台部横ナデ。内面筒部中程指押え、絞り目、下位以下右方向ケズリ。	密。1～2㎜径の白色微細粒わずかに含む。	良　好	黄茶色	内外面朱塗り B区
弥生土器鼓形器台	17	3 12	4	復口径15.6	受部破片。複合口縁状で、外面に擬凹線文を施す。	内外面横ナデ。	密。0.5～2㎜径の長石、石英含む。	良　好	外面 淡橙色 内・断面 淡橙黄色	B区
弥生土器高杯	18	13	4	復底径10.0	脚台部破片。八の字状に開き、接地面は角張り、水平方向に突出する稜をもつ。	脚台部内外面横ナデ。脚部内面ケズリ。	粗。1～4㎜径の白色砂粒多量に含む。	良　好	淡橙黄色	B区
弥生土器脚台部	19	13	4	底　径18.0	脚台部破片。大きく八の字状に開く脚台部は複合状を呈し、外面に3条の凹線文を施す。	脚台部外面横ナデ。内面ケズリ。	密。1～2㎜径の石英点在。	良　好	淡黄茶白色	
土師器甕	20	13	4	復口径19.0	口縁部破片。直立して立ち上がり、端部がわずかに外方に屈曲する複合口縁で、器壁は薄い。	内外面横ナデ。	密。1㎜径の白色砂粒わずかに含む。	良　好	外面 橙色 内面 淡黄茶色	B区
土師器甕	21	13	4	復口径14.0	口縁部～頸部破片。やや外反気味に外傾する複合口縁で、端部は尖がる。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。	良　好	淡黄茶色	B区
土師器甕	22	13	4	復口径13.6	口縁部～頸部破片。やや外反気味に外傾する複合口縁で、上端面は角張り、やや外方に肥厚する。下端の稜は外方に突出する。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	粗。1㎜径の白色砂粒を多く含む。	普　通	橙黄褐色	B区
土師器甕	23	13	4	復口径16.0	口縁部～頸部破片。外傾する複合口縁で、上端面は角張り、下端の稜は外方に鋭く突出する。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部ケズリ。	密。微細砂粒含む。	良　好	茶褐色	B区
土師器甕	24	13	4	復口径10.2	口縁部～頸部破片。内傾する短かい複合口縁で、上端は肥厚し、下端の稜は外方に突出する。	口縁部内外面横ナデ。内面肩部からケズリ。	密。	良　好	淡黄茶色	B区
土師器甕	25	13	5	復口径20.0	口縁部破片。ほぼ直立する短かい退化した複合口縁状を呈し、端部は尖がり気味。	内外面横ナデ。	粗。1～2㎜径の白色砂粒を多く含む。	普　通	内・外面 淡黄茶色 断面 黄灰褐色	B区
土師器甕	26	3 13	5	復口径23.8	口縁部～肩部破片。外反する単純口縁で、端部は尖がり気味。頸部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外面肩部以下ヨコハケ。内面頸部以下斜め右上方向ケズリ。	密。1～2㎜径の白色砂粒多く含む。	良　好	黄茶色	外面スス付着 B区
土師器甕	27	13	5	復口径24.0	口縁部～肩部破片。外反する単純口縁で、端部は尖がる。頸部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部以下左方向ケズリ。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	良　好	黄茶色	B区
土師器甕	28	3 13	5	復口径20.8	口縁部～胴部破片。外反する単純口縁で、端部は尖がり気味。頸部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外面胴部ナナメハケ。内面頸部以下斜め右上方向ケズリ。	粗。1～3㎜径の白色砂粒含む。	良　好	内・外面 濃橙黄褐色 断面 淡橙黄色	B区
土師器甕	29	14	5	復口径19.6	口縁部～肩部破片。外反する単純口縁で、端部はやや角張る。頸部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外面肩部以下タテハケメ。内面頸部以下ケズリ。	密。微細砂粒含む。	良　好	橙黄茶色	B区
土師器甕	30	14	5	復口径20.0	口縁部～肩部破片。外反する単純口縁で、端部は丸味をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部以下左方向ケズリ。	密。1㎜径の白色砂粒含む。	良　好	外面 淡橙色 内面 淡黄茶色	外面朱塗りわずかに残る。B区

器　種	土器番号	挿図	図版	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎　土	焼成保存	色　　調	備考
土師器甕	31	14	5	復口径27.0	口縁部～肩部破片。外傾する複合口縁で、端部は尖がり気味。頸部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外面頸部、肩部以下タテハケメ、ナナメハケメ。内面頸部以下左方向ケズリ。	密。1～3㎜径の白色砂粒含む。	良　好	暗黄茶色	外面スス付着B区
土師器甕	32	14	5	復口径21.5	口縁部～胴部破片。外傾する複合口縁で、端部はやや角張る。頸部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外面肩部以下タテハケメ。内面頸部以下斜め右上方向ケズリ。	粗。1～3㎜径の白色砂粒含む。	良　好	外・断面 黄茶褐色 内面 濃茶褐色	B区
土師器甕	33	14	5	復口径21.0	口縁部～胴部破片。外傾する複合口縁で、端部は丸味をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外面肩部以下タテハケメ。内面頸部以下右方向ケズリ。	密。1～3㎜径の白色砂粒含む。	良　好	橙黄茶色	外面スス付着B区
土師器甕	34	14	5	復口径23.6	口縁部～肩部破片。外反気味に外傾する単純口縁で、端部は尖がる。頸部は「く」の字状に屈曲する。	口縁部内外面横ナデ。外面胴部にナナメハケメ残る。内面頸部以下右方向ケズリ。	粗。1～3㎜径の白色砂粒多量に含む。	良　好	橙黄色	外面スス付着B区
土師器有台杯	35	14	5	復底径11.0	高台破片。高台は低く、接地面は平坦。腰に平坦面を作り出す。	内外面回転横ナデ。	密。微細砂粒含む。	普　通	淡橙黄色	赤色塗彩残るB区
土師器高杯	36	14	5	復底径8.2	脚部破片。「八の字」状に大きく開く脚台部で、端面に2条の浅い沈線を施す。	外面タテハケメ、ナデ。内面柱状部絞り目。脚台部ナナメハケメ。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	普　通	内・外面 橙黄色 断面 灰黄色	B区
土師器把手	37	3 14	5		牛角状の把手。	ケズリ後ナデ。			橙黄色	B区
土師器把手	38	14	5		牛角状の把手。	ケズリ後ナデ。			橙黄褐色	B区
土製支脚	39	15	5		尻尾部、脚部欠損。	ナデ、指押え。	密。1～3㎜径の白色砂粒含む。	良　好	橙黄褐色	B区
土製支脚	40	3 15	2 6	高さ　16.9 復底径12.8	尻尾部は水平方向に延び、脚部は円柱状で、八の字状に大きく開く脚端部へ続く。	ケズリ後ナデ、指押え。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	良　好	黄茶色	B区
土製支脚	41	3 15	6		尻尾部は長めで、やや水平方向に延びる。二本の支脚部の開きは鈍い。	ケズリ後ナデ。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	良　好	橙黄色 断面 橙黄灰褐色	B区
土製支脚	42	15	6	復底径12.8	脚部はほぼ円柱状で、八の字状に鈍く開く脚端部へ続く。底部は中空状に高くくぼむ。	外面タテハケメ。内面ケズリ。脚端部内外面ナデ。	密。1～4㎜径の白色砂粒含む。	良　好	内・外面 淡黄橙色 断面 黄橙色～灰褐色	B区
かまど	43	3 16	1 6	高さ　38.4	口縁部～右側焚口部の破片。底部接地面は平坦。	口縁部内外面ナデ。体部外面タテハケメ。内面タテ方向のケズリ。	密。1～3㎜径の白色砂粒含む。6㎜径程度の大粒点在。	良　好	明橙茶色	内面口縁部スス付着B区
かまど	44	17	6		口縁部～右側庇部の破片。	口縁部内外面ナデ。庇部ナデ。	密。1～3㎜径の白色砂粒含む。	良　好	淡黄茶色	B区
かまど	45	17	6		口縁部～左側庇部の破片。	口縁部内外面ナデ。庇部、体部ナデ、タテハケメ。	密。1～4㎜径の白色砂粒含む。	良　好	淡橙色 断面 灰茶色	B区
かまど	46	3 17	6		口縁部～右側庇部の破片。	口縁部内外面ナデ。外面庇部ナデ、内面ヨコハケ。	密。2㎜径の長石・石英含む。	良　好	外面 明茶色 内面 暗茶褐色	B区
かまど	47	17	6		左側焚口部の破片。	外面体部上位ヨコハケ、中位以下タテハケメ、ナデ。内面上位タテハケメ、以下タテ方向のケズリ。	密。1～4㎜径の砂粒含む。	良　好	外面 赤茶色 内面 暗赤茶色	B区

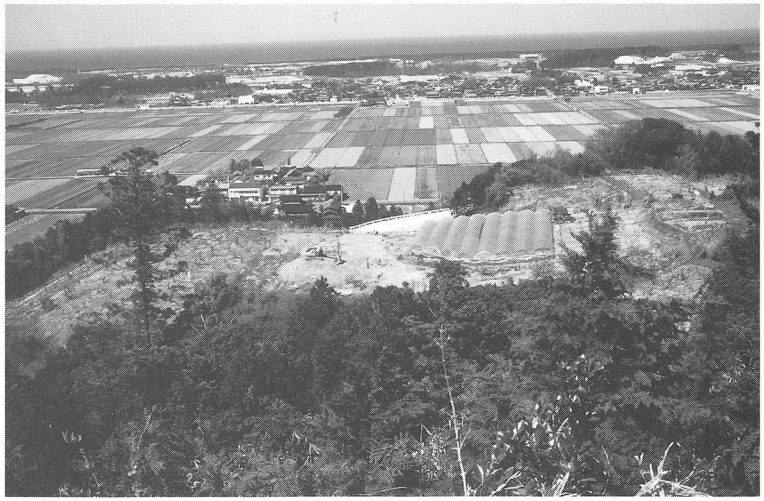
器　種	土器番号	挿図	図版	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎　土	焼成保存	色　　調	備考
須恵器杯蓋	48	18	6	復口径12.8	杯蓋の破片。口縁部は内湾し、端部は薄く丸味をもつ。口縁部と天井部の境は2条の浅い沈線で区別される。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部三周ヘラ削り、中心部ナデ。内面天井部は仕上げナデ。	密。1㎜径の白色砂粒含む。	良　好	濃灰色	B区
須恵器杯蓋	49	18	6	口　径13.7	完形品。口縁部は内湾気味で、端部は薄く丸味をもつ。口縁部と天井部の境は強めのナデにより鈍い稜をもつ。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部二周ヘラ削り、中心部ナデ。内面天井部仕上げナデ。	密。1～3㎜径の白色砂粒含む。	良　好	灰色	外面天井部ヘラ記号 B区
須恵器杯蓋	50	3 18	7	復口径13.1	杯蓋の破片。口縁部は内湾し、端部は丸味をもつ。口縁部と天井部の境に稜はなく、不明瞭。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部二周ヘラ削り、中心部ナデ。内面天井部仕上げナデ。	密。1㎜径の白色砂粒含む。	良　好	灰色	B区
須恵器杯蓋	51	3 18	7	復口径12.9	杯蓋の破片。口縁部は内湾気味で、端部はやや肥厚し、丸味をもつ。口縁部と天井部の境は稜はなく、不明瞭。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部ヘラ切り後、ナデ。内面天井部仕上げナデ。	密。1～3㎜径の白色砂粒含む。	良　好	灰色	外面天井部ヘラ記号 B区
須恵器杯蓋	52	3 18	7	復口径11.4	杯蓋の破片。口縁部は大きく内湾し、端部は丸味をもつ。口縁部と天井部の境は稜はなく、不明瞭。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部ヘラ切り未調整。内面天井部仕上げナデ。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	良　好	灰色	外面天井部ヘラ記号 B区
須恵器杯蓋	53	18	7	復口径9.8	杯蓋の破片。口縁部は内湾し、端部は丸くおさめる。口縁部と天井部の境は稜はなく、不明瞭。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部ヘラ切り未調整。内面天井部仕上げナデ。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	良　好	濃灰色	内面天井部ヘラ記号 B区
須恵器杯蓋	54	18	7	復口径12.3	杯蓋の破片。口縁部は内湾し、端部は丸味をもつ。口縁部と天井部の境は不明瞭。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部ヘラ切り後ナデ。内面天井部仕上げナデ。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	良　好	濃灰色	B区
須恵器杯蓋	55	18	7	復口径9.6	杯蓋の破片。口縁部は内湾し、端部は丸味をもつ。口縁部と天井部の境は稜はなく、不明瞭。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部ヘラ切り未調整。内面天井部仕上げナデ。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	良　好	濃灰色	B区
須恵器杯蓋	56	18	7	口　径9.3	完形品。宝珠状のつまみがつき、かえりは口縁部からわずかに出る。	内外面回転横ナデ。	密。1～2㎜径の白色砂粒わずかに含む。	良　好	外面 濃灰色 内面 灰色	B区
須恵器杯蓋	57	3 18	7	復口径10.2	杯蓋の破片。擬宝珠状のつまみがつき、かえりは口縁部からわずかに出る。	外面回転横ナデ。内面天井部仕上げナデ。	密。1～2㎜径の白色砂粒、黒雲母を含む。	良　好	外面 濃灰色 内・断面 灰色	外面緑釉 B区
須恵器杯蓋	58	18	7		杯蓋の破片。乳頭状のつまみがつく。	外面天井部三周ヘラ削り。内面天井部仕上げナデ。	密。白色微細砂粒含む。	良　好	濃灰色	B区
須恵器杯蓋	59	18	7	復口径10.0	蓋の破片。	内外面回転横ナデ。	密。微細砂粒含む。	良　好	明灰色	B区
須恵器杯身	60	18	7	口　径10.6	完形品。立ち上がりは内傾し、受部は肥厚し丸い。	口縁部内外面回転横ナデ。底部調整不明。内面天井部仕上げナデ。	密。1～2㎜径の砂粒含む。	良　好	外面 灰黄色 内面 灰色	内面底部ヘラ記号 C区
須恵器杯身	61	18	8	復口径12.2	杯身の破片。立ち上がりは内傾し、受部は丸くおさめる。	内外面回転横ナデ。	密。1㎜径の白色砂粒わずかに含む。	良　好	外面 灰色 内・断面 灰褐色	B区
須恵器杯身	62	3 18	8	口　径10.5	立ち上がりは短かく、内傾し、断面三角形を呈す。受部は器壁は薄く、丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ。外面底部ヘラ削り。内面底部中央仕上げナデ。	粗。1～7㎜径の白色砂粒含む。	良　好	外面 濃灰色 内・断面 灰色	B区

器種	土器番号	挿図	図版	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
須恵器 杯身	63	18	8	復口径11.6	杯身の破片。立ち上がりは短かく、大きく内傾し、受部は丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ。 外面底部ヘラ切り未調整。 内面底部仕上げナデ。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	良好	灰色	B区
須恵器 杯身	64	18	8	復口径8.9	杯身の破片。立ち上がりは短かく、内傾し、口縁部からわずかに出る。受部は角張る。	口縁部内外面回転横ナデ。 外面底部ヘラ切り未調整。 内面底部仕上げナデ。	密。1㎜径の砂粒含む。	良好	灰色	B区
須恵器 杯身	65	18	8	口径10.6	立ち上がりは短かく、内傾し、受部は丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ。 外面底部ヘラ切り後ナデ。 内面底部仕上げナデ。	密。1～3㎜径の白色砂粒含む。	普通	濃灰色 断面 濃灰色～茶褐色	B区
須恵器 杯身	66	18	8	復口径12.4	杯身の破片。立ち上がりは退化して短かく、内傾し、口縁部から出ない。受部は丸くおさめる。	口縁部内外面回転横ナデ。 外面底部ヘラ切り未調整。 内面底部仕上げナデ。	密。1～2㎜径の白色砂粒含む。	良好	濃灰色	B区
須恵器 有台杯	67	18	8	復口径11.8 復底径7.8 器高4.4	口縁部は内湾気味に外傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。高台は低く、底部端に付けられ、下端接地面は平坦。	口縁部内外面回転横ナデ。外面底部ナデ。内面底部仕上げナデ。	密。白色微細砂粒含む。	良好	濃灰色	C区
須恵器 長頸壺	68	18	8	底径7.2	底部。高台は「八の字」状に開き、下端接地面はほぼ平坦。	杯部回転横ナデ。ヘラ削り。 底部ナデ。	密。白色微細砂粒含む。	良好	灰色	B区
須恵器 高杯	69	18	8		長脚で、一条の浅い沈線を巡らす。透かしはない。	内外面回転横ナデ。	密。微細砂粒含む。	良好	濃灰色	B区
須恵器 有蓋高杯	70	3 19	8	口径11.1 復底径10.1 器高10.0	立ち上がりは内傾し、受部は丸くおさめる。脚部は低脚で、三角形透かしを三方に入れる。	外面口縁部以下回転横ナデ。 内面杯底部仕上げナデ。	密。1～2㎜径の砂粒含む。	良好	外面 濃灰色 内面 灰色	B区
須恵器 有蓋高杯	71	19	8	口径10.5	杯部。立ち上がりは内傾し、受部は丸い。	外面回転横ナデ。 内面杯底部仕上げナデ。	粗。1～2㎜径の白色砂粒多く含む。	良好	灰色	外面灰釉 B区
須恵器 高杯	72	3 19	1 8	底径9.8	杯底部～脚部。低脚で、透かしはない。	内外面回転横ナデ。 内面杯底部仕上げナデ。	密。1～3㎜径の白色砂粒と、1～2㎜径の黒雲母含む。	良好		B区
須恵器 無蓋高杯	73	19	8	復口径15.0 底径8.4 器高9.4	杯部は椀状で、端部は丸くおさめる。脚部は低脚で、長方形透かしを一方に、もう一方の透かしは切れ目状となる。脚端部外面に直立する面をもつ。	内外面回転横ナデ。	密。白色微細砂粒含む。	良好	濃灰色	B区
須恵器 高杯	74	19	8	底径9.8	杯底部～脚部。杯部は椀状。脚部は低脚で、透かしは二方とも切れ目となる。 脚端部外面にやや内傾する面をもつ。	内外面回転横ナデ。	密。白色微細砂粒わずかに含む。	良好	灰色	B区
須恵器 高杯	75	19	9	底径9.8	杯底部～脚部。		密。	良好	灰色	B区
須恵器 高杯	76	19	9	底径11.2	脚部。脚部は低脚で、三角形透かしを二方に入れる。脚端部外面に内傾する面をもつ。	内外面回転横ナデ。	密。	良好	濃灰色	B区
須恵器 提瓶	77	3 19	9	復口径12.0 最大幅21.4 高さ26.4	やや外傾する筒状の口縁部をもち、把手は形骸化したボタン状のものを貼り付ける。	口縁部内外面回転横ナデ。外面肩部～胴部カキ目、底部平行タタキ目。 内面底部同心円タタキ。	密。微細砂粒わずかに含む。	良好	外面 灰褐色 内面 灰色	B区

器　種	土器番号	挿図	図版	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎　土	焼成保存	色　　調	備考
須恵器壺	78	19	9	復高台径10.0	低部。高台は「八の字」状に開き、下端接地面は平坦。	外面ナデ後、平行タタキ目。底部外面タタキ後、仕上げナデ。内面ナデ後、同心円タタキ。	密。1㎜径の白色砂粒含む。	良好	外面　灰黄色 内面　濃灰色	C区
須恵器瑳	79	20	9	胴部径12.2	胴部破片。肩部にボタン状のふくらみが付く。	外面調整不明。	ち密。	普通	濃灰色 断面　茶褐色	灰釉 B区
須恵器短頸壺	80	20	9	復口径6.0	口縁部～胴部破片。やや外反する口縁部。	口縁部内外面回転横ナデ。 体部カキ目。	密。1㎜径の白色砂粒含む。	普通	外面　濃灰色 内面　灰色 断面灰色～灰茶色	B区
備前すり鉢	81	20	9	復口径34.0	口縁部破片。内傾する面をもつ。	外面回転横ナデ。 内面におろし目。	密。	良好		B区
土垂	82	20	9	最大長4.0 最大幅4.0 最大厚3.4					黄茶褐色	B区
器　種	石器番号	挿図	図版	法量(cm)	形態上の特徴		石　材		色　　調	備考
紡錘車	S 1	20	9	最大長4.8 最大幅4.7 最大厚2.4					淡黄白色	

図　　版

B区 遺物出土状況・須恵器72ほか（北から）



調査区 遠景（南から）

B区 SS—02 遺物出土状況・かまど43（北西から）

B区 SS—02 掘下中（東から）

図版 1

B区 完掘状況（北西から）

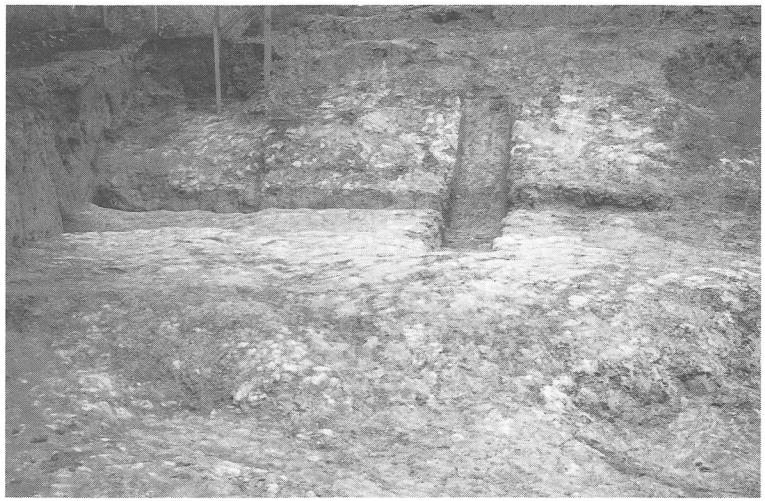
B区 SS—03 遺物出土状況・土製支脚40ほか（北東から）

C区 ピット群P 8～P15（北から）

B区 完掘状況（東から）

図版 2

A区 完掘状況（南から）



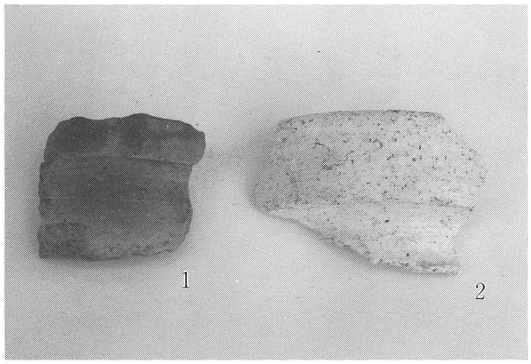
D区 SS—06 完掘状況（北西から）

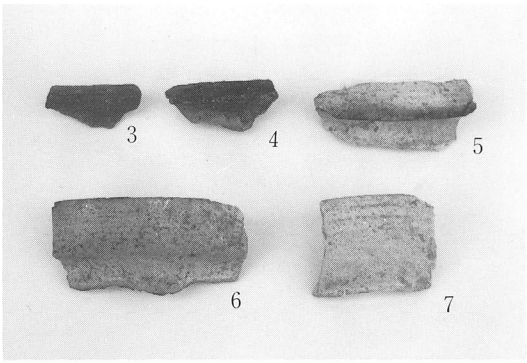
C区 完掘状況（南東から）

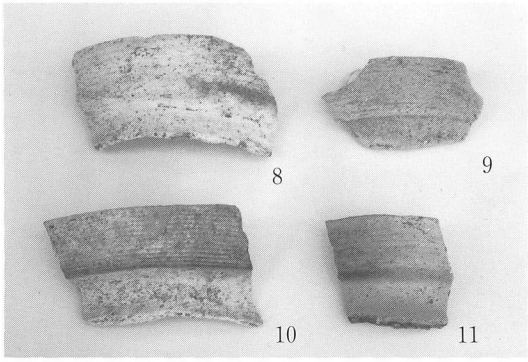
D区 SS—06 完掘状況（北西から）

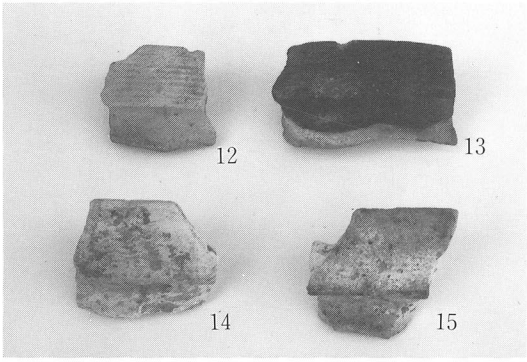
図版3

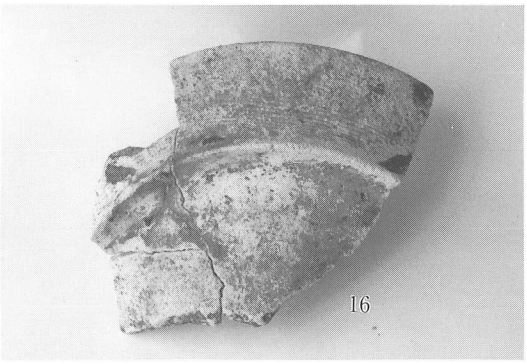
図版 4

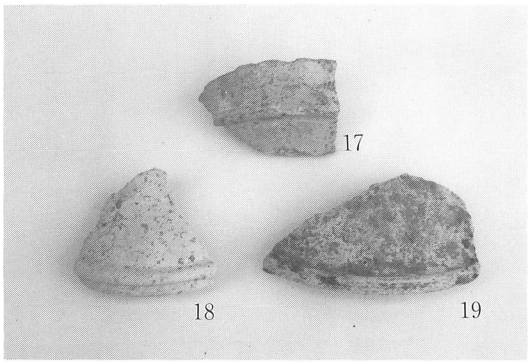


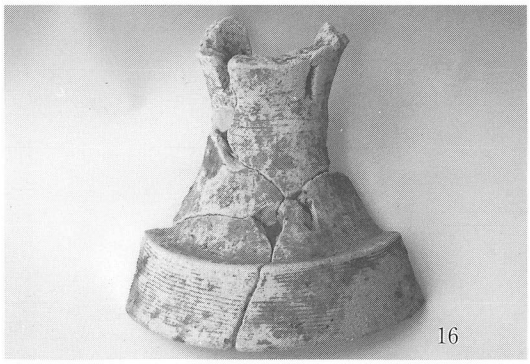


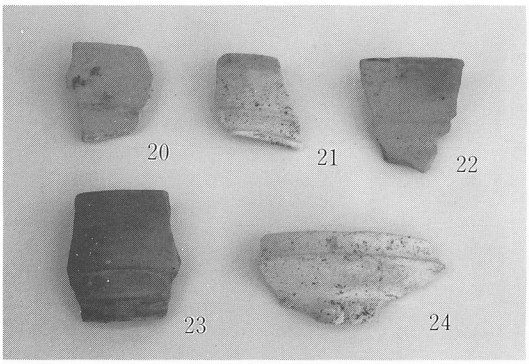




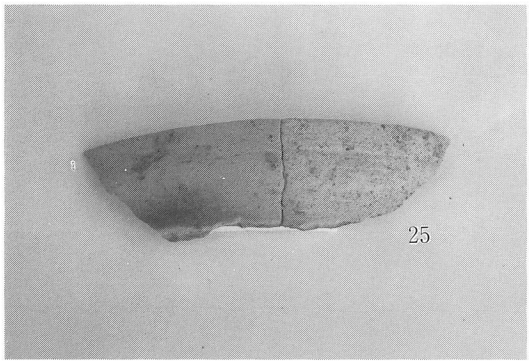


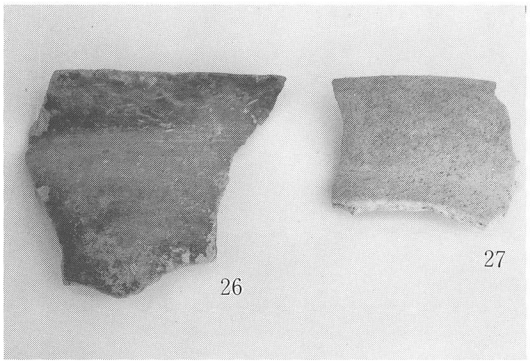


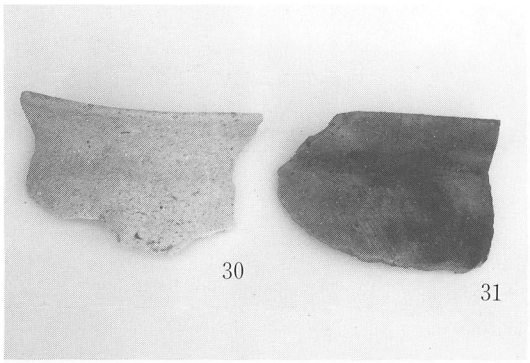


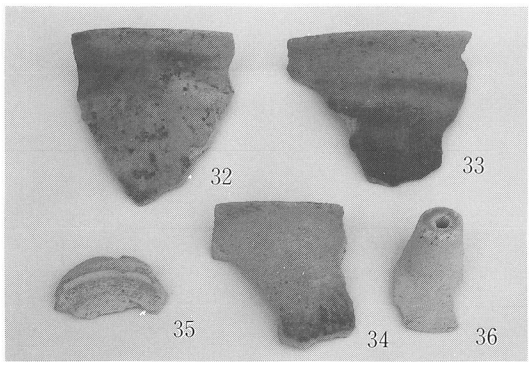


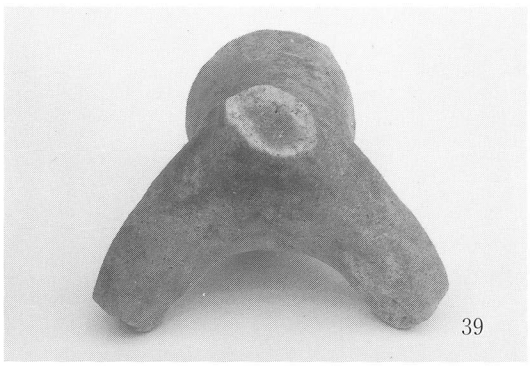
図版 5

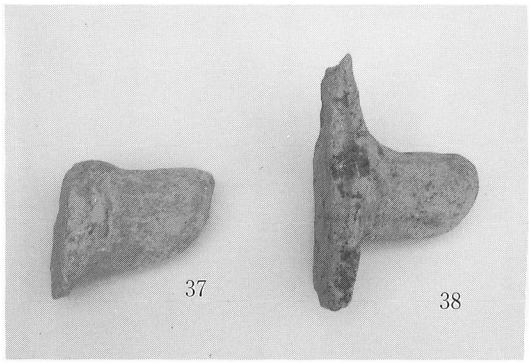


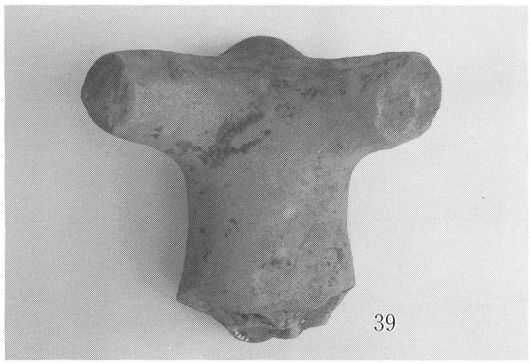




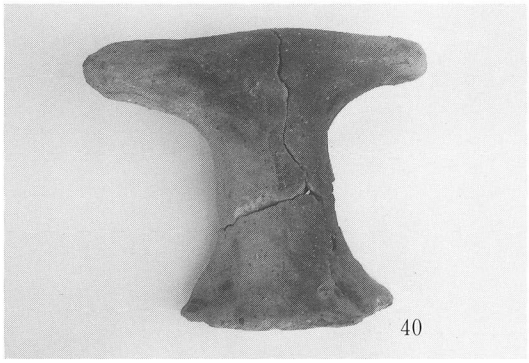


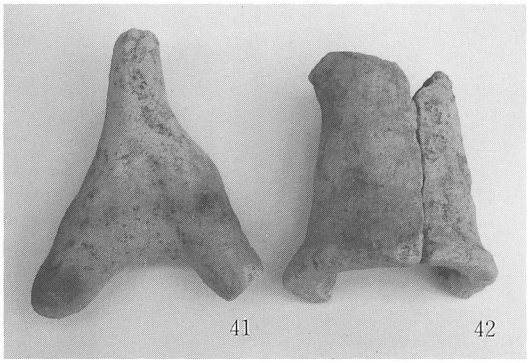


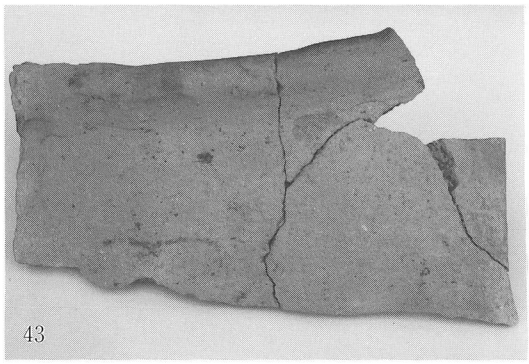




図版 6


40

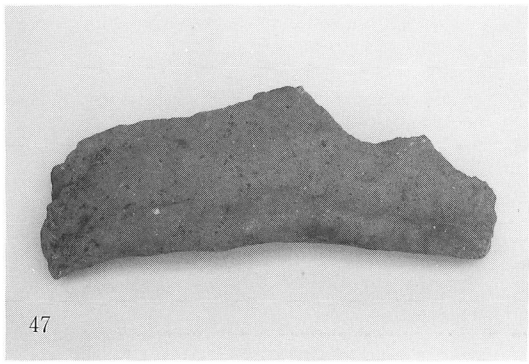

41 42

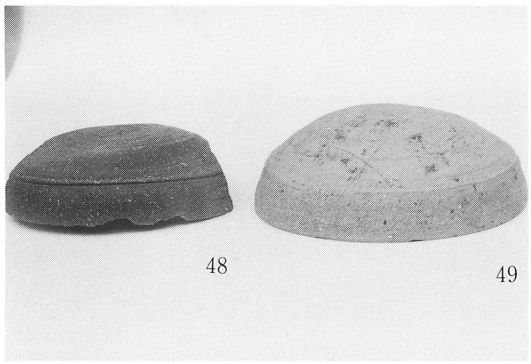

43

44

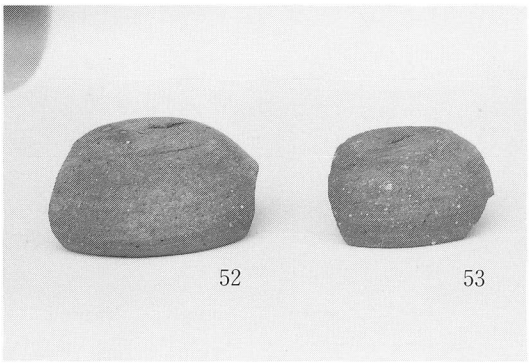
43

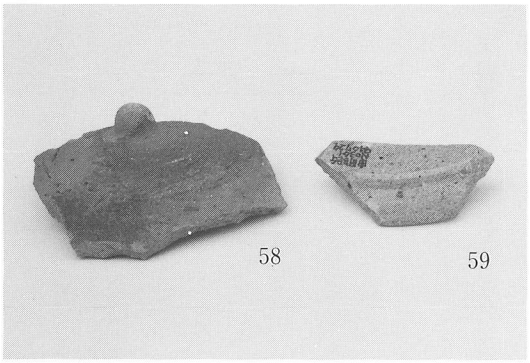
46 45

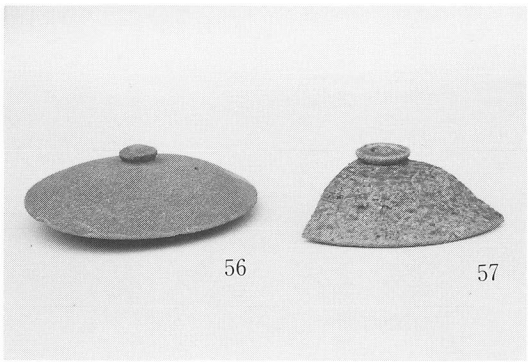

47

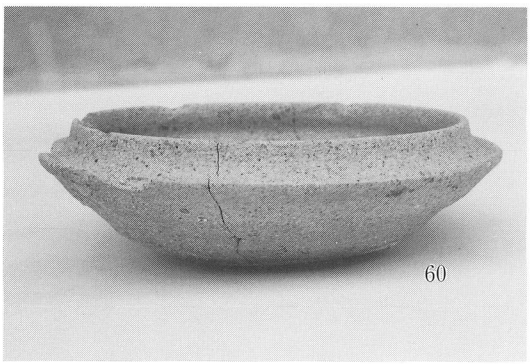

48 49

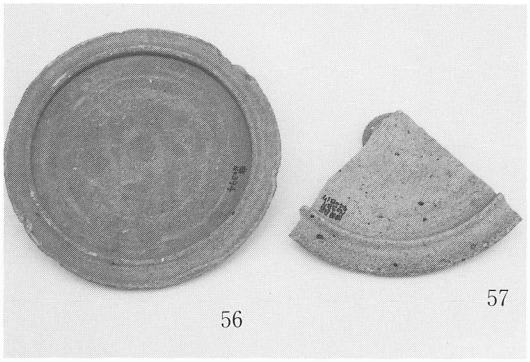
図版 7

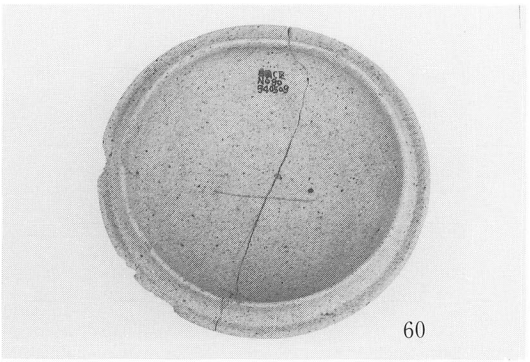




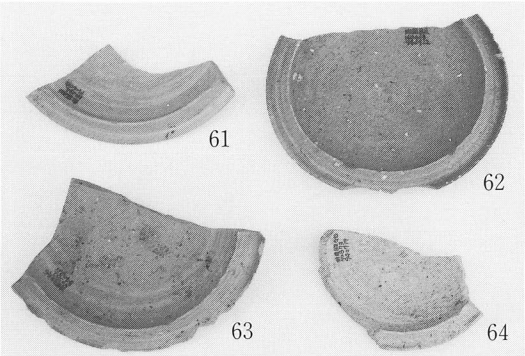


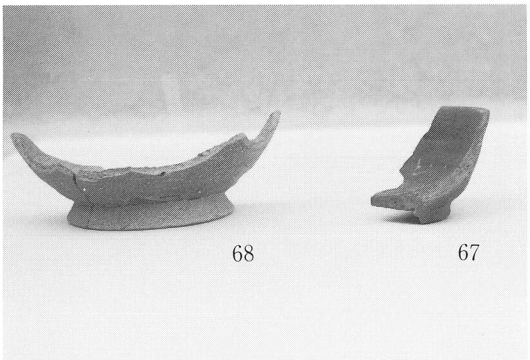


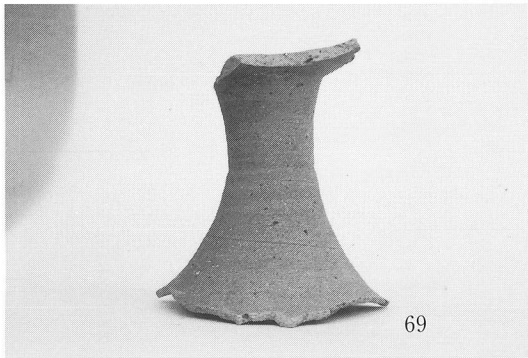


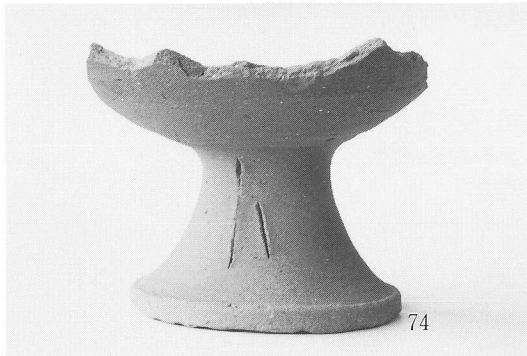


図版 8



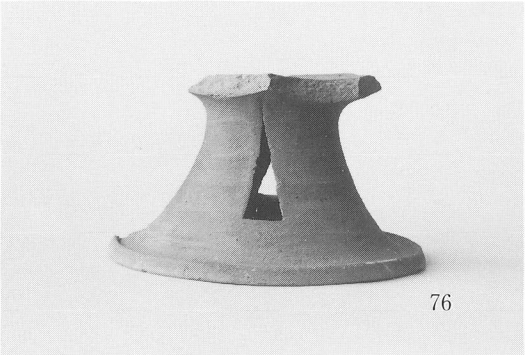


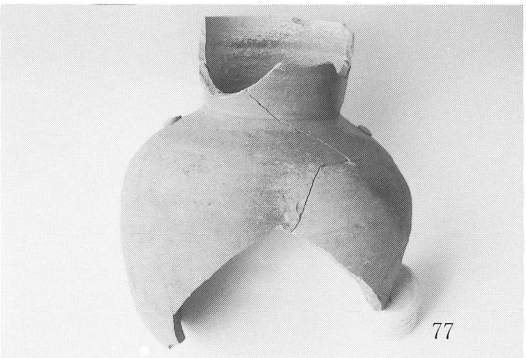


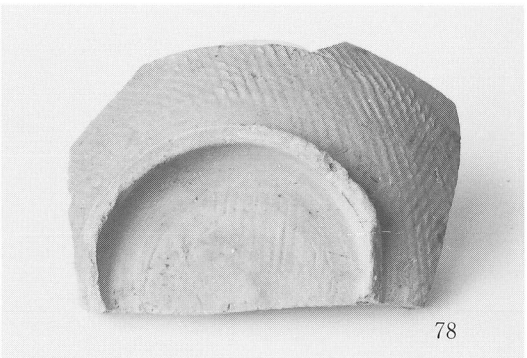


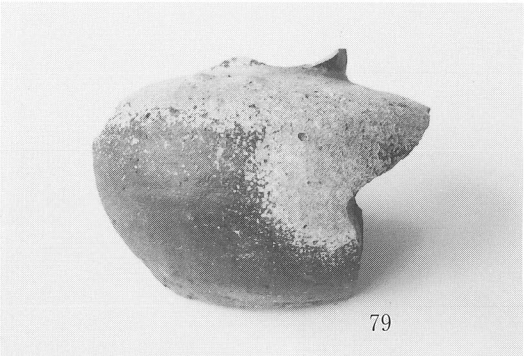
図版 9

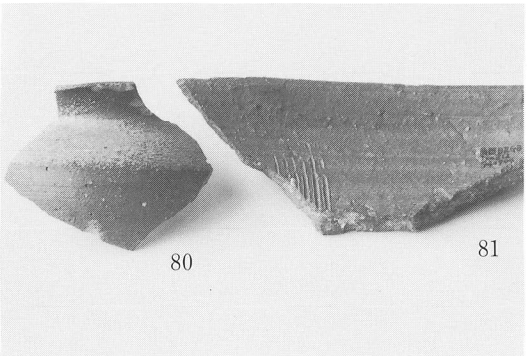
75

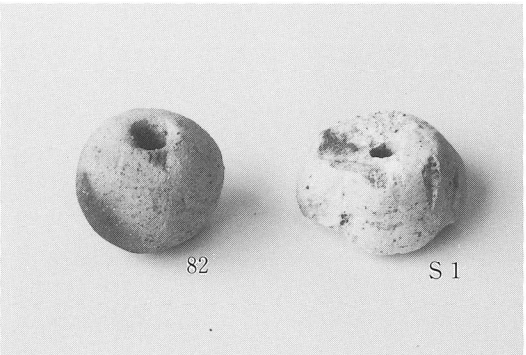

76


77


78


79


80 81


82 S 1

平成７年３月印刷
平成７年３月発行

北条町埋蔵文化財報告書17
曲第１遺跡(岡遺跡)発掘調査報告書第１集

編集
発行　鳥取県東伯郡北条町土下112
北条町教育委員会

印刷
製本　勝美印刷株式会社鳥取支店
鳥取県東伯郡羽合町長瀬818-1